

ユメノツボミ～春夢の
花～

ロバート・こうじ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夢乃蕾は夢を持っていた。ポケモンと一緒に旅をし、ポケモンリーグのチャンピオンになることを。幼い少女はポケモンと歩み、その夢に向かって前へと進んでいく。

※ポケモン公式アニメ『ユメノツボミ』をみて、尊さに影響を受けています。

※アニポケの要素も含まれます。

※基本ゆるいお話ですが、唐突に重い設定もあります。

目次

1章 旅立ちと決意編

1話 わたしのパートナーにならない

1

2話 ムノーとサイホーン

13

3話 お月見山での大騒動

27

4話 新種の遺伝子！イーブイ！！

39

5話 ハナダシテイ！新たなる決意！！

51

2章 サントアンヌ号編

6話 二人の王者！栄光への挑戦！！

60

7話 船上のバトル!! クロツグという
トレーナー！（上）

78

1章 旅立ちと決意編

1話 わたしのパートナーにならない

とある少女は鼻歌交じりに語る。

夢はいつか本当になる——

夢は叶うもの——

誰かが歌い、誰かが言った言葉だ。ここではそれを受け継いだ少女の物語をしよう。

その少女の夢は純粹であった。何かを成し遂げたい情熱に燃えていた。少年少女が一度は胸に抱くも、現実の厳しさを知るうちに諦め、捨てていく幼稚な夢。それを成し遂げる過程に一人では越えられない壁を——その理を生き物と乗り越えた少女を。

—

カントー地方のマサラタウンは真つ白で純粹な街と呼ばれ、春に街から旅立つ少年少女に生き物——ポケモンを手渡される。『ポケモン』の正式名所は『ポケツトモンスター』と呼ばれ、その生きもの達がいたるところに住んでいる。ある人は可愛がり、ある人は勝負をして人間と共存をしていた。

窓の外には暖かな陽気の太陽。青空の広がる朝。カーテンの隙間からもれた明かり

から寝返りをうち、そのぬくもりを布団の中で、少女は、眠り続けていた。

「すや…すや…もう食べられないよお〜」

ベッドで『ねごと』を発動している少女が物語の主人公「夢乃 蕾」だ。ポケモン協会の規定では10歳になった子にはポケモン取り扱い免許が許されている。ここマサラタウンでは朝の8時にポケモン研究科であるオーキド博士から初心者用ポケモンを一体貰い、ポケモントレーナーとして旅立てるのだ。だが、時計の針は10時を過ぎていた。

「うえひひ…やったあ〜わたし、ちゃんびよおんだ〜」

少女はすでに夢で大食いチャンピオンとなった。もちろん、少女には確かな夢がある。パパやママの様にポケモンと一緒に旅をしてポケモンリーグに挑戦し、ポケモンチャンピオンになりたい。小さな身体に――儂いほど小柄な身体に、大きな夢を描いていた。

「おやおやあ〜つぼみはまだ寝てたか。今日は大事な日なのに、しょうがないわね」

階段から顔を覗かせた母親は片手から上下に赤と白のボールを静かに投げ、スリーパーを出す。

「スリーパー『ゆめくい』!」

スリーパーの振り子が左右に揺れるたびに蕾はもがき苦しみます。母親とスリー

パーに眠り苦しむ娘。傍からは悪魔払い中のエクソシストである。

「うごごご……うわあ！ホットドッグに襲われるー!!……あれえ？」

「つぼみ……どんな夢を見てたのよ」

ホットドッグに見立てた犬にでも襲われていたのか。ママは肩をすくめた。目覚めのタイミングに合わせてスリーパーを引っ込める手際に、母親が歴戦たるトレーナーの片鱗を窺わせる。

「あつ……そうだった。今日はポケモンを貰える日だったよ。ママあ……今何時？」

「もう10時過ぎてるわよ。朝食食べてから行きなさい」

「うそお!!」

思わずベッドから飛び跳ねた。

「食べてる時間ないよおくすぐ行くよ!!」

「待ちなさい、つぼみ」

「なに、ママ!?!」

「間に合わないにせよ、寝癖も顔も酷いわよ。女の子なんだから、身だしなみくらい整えてから行きなさい」

コーヒークップを優雅に持って飲むママは落ち着いている。そのような事もあり、蕾は髪をふわりとした毛並みに整え、顔を洗って気を引き締めた。最後に茶色の帽子を

被った蕾は大きな鏡の前でポーズを取り繕う。朝食を食べて玄関のドアを閉めた手前——大慌てで走った。

二

「うわあ〜ん。完全に遅刻だー!!」

茶色の帽子に薄手の白いパーカー。青色の短パンに旅用のリュックを背負った蕾は全速力で駆けていた。土埃を舞わせ、木製の橋を渡り、途中ですれ違う知り合いに挨拶をした。やがてオーキド研究所に着いた時には、食べたばかりの朝食が消化しきれず、お腹をさする。

「痛てて。食べてすぐに走っちゃったから、お腹痛いよ」

お腹の痛みが落ち着いてから研究所の扉を開けた途端、蕾は白衣の初老と目が合った。オーキド・ユキナリ。一般的にはオーキド博士としてポケモン研究者として親しまれている。少し力強い目力も、会ってみれば優しい雰囲気のある人物だ。

「あの〜ごめんなさい。オーキド博士、まだポケモンって残ってますか?」

「うん? 君のポケモン? たしかに、予定より一人足りないと思つとつたが」

「じゃあ、もしかすると——もしかして!!」

「その、もしかしてじゃ!」

期待の言葉に胸が膨らむ。初心者用ポケモンとして比較的人に懐きやすいと呼ばれ

ている、とかげポケモン『ヒトカゲ』・かめのごポケモン『ゼニガメ』・たねポケモン『フシギダネ』研究所の奥に案内されて3つのモンスターボールを同時に開けた瞬間——何も起こらなかった。

「——すまないが、もう残つとらんよ。最後のゼニガメも入れ違いで別の子に渡してしまつての。今は研究用のポケモンだけじゃ！」

「うええ〜そんなあ」

蕾は頭を抱えながら、走つて乱れた髪の毛ごと乱暴に頭をかいた。整髪すれば明るいオレンジ色に映えるその髪も、そそっかしいせいか子どもらしさをより引き立たせていた。

「1秒の時間が人生を左右することもある。そして、人生諦めも肝心じゃ」

「ええ：それじゃ私、ポケモンなしで旅に出るんですか」

「そんな危ないことはさせんよ。草むらや森にはポケモンが襲つてくることもあるからの」

オーキド博士は指先で頬をポリポリとかく。

「このまま帰つても、もつたいなからう。来てもらつたついでにワシの届け物をトキワシティのフレンドリイショップまで届けてはくれないか」

「行く途中に襲われない？」

「マサラタウンは穏やかな街じゃから、そんな心配はないぞ。無事に届けてくれれば、ワシの研究している余り物のポケモンじゃが一匹だけ譲ろう」

「本当ですか!!行つてきまーす!」

明るく元気な声で答えた。オーキド博士は包み紙を蕾に渡すと、それをリュックに丁寧にしてしまう。素直過ぎる少女に苦笑するも、根が真つ直ぐな姿勢はポケモンを引き寄せると、それに近い印象をもっていた。

三

「あのおーキド博士からお届け物です」

「ああ、これね。はいはい」

「あ…それと、こここのモンスターボールを10個とキズぐすり3個ください」

「はいはい。毎度あり」

日用品の入ったカバンに入るだけのボールとキズぐすりを詰め込んでおく。オーキド研究所に戻れば、蕾にもポケモンを譲ってもらえるのだ。最低限のボールとくすり位は揃えておけば、何時でも旅立てる。

「これでおこずかい全部だ。せめて、戻る時にポケモンの一匹は入つてくれないかなあ」
1番道路をゆつくりと歩き、近くのポケモンを探っていく。1番道路は田舎でのんびりした道でポツポツやコラッタが多く生息している。珍しい時は草ポケモンのマタツボ

ミヤナゾノクサも見かけるが、蕾はまだ見たことが無かった。

モンスターボールを投げれば弱らせなくても捕まえられるポケモンに意気揚々と聞き耳をたてていると、騒がしい鳴き声に注意が向く。三匹のコラツタが丸いのを囲んでいたのが見えた。

「あれって、コラツタ！あとは知らないポケモンだけど、いじめられてる!!」

大きさは大体50センチメートルで紫色の所々に棘のある身体をしている。ギザギザした大きな耳に口を閉じれば尖った大きな前歯がちよんと出てしまいそうだ。3匹のコラツタに体当たりや前歯でかじられているポケモンは余力が無いのか、丸くうずくまったまま動かないでいる。

「えい！モンスターボール!!」

ボールの感触や握り方も知らない蕾にとつて、狙った場所に投げる技術は無い。買ったばかりのモンスターボールを抱えられるだけ持ち——空中に放った。突然できた無数の丸い影にコラツタ達が気を取られた隙に、蕾は足を止めずに紫色のポケモンを抱きかかえる。獲物を横取りされたコラツタ達が追いかける前に、モンスターボールに当たってしまった、ジダバタと暴れていた。

「きみ、大丈夫？待ってて！すぐに——」

蕾がポケモンを診ようとしたとき、モンスターボールから三匹のコラツタが姿を現し

た。後ろから一瞥していた蕾は、すつとんきような声をあげる。

「うわあ!!なんで、ボールに入らないの!?!」

コラツタやポップであればモンスターボールで捕まえるのは容易い。ポケモンの気分が良い時や気づかれなければボールに入るも、蕾とは状況が違う。彼らの獲物を横取りして怒らせた状態では入ってなどくれない。まだポケモンを知らない蕾には知るよしもないが。

三匹のコラツタに追いかけられながらも、全速力で走っていく。やがてマサラタウンの看板付近まで走り抜ければ、もうすぐだ。気を抜く蕾の前に、大きなネズミポケモンが現れた。

身体は大きく丸く、前歯はより目立つ。体色は黄土色に、腹部は黄色にと大きく変色している。コラツタが進化したポケモン——ラツタだ。

「えーなんでここに、ラツタがいるの!?!」

身構える前に、気づけば蕾の眼前にラツタとの距離が縮まる。コラツタの覚える『たいあたり』よりも早い『でんこうせっか』が腹部に直撃し、生き物を抱えたままの蕾は受け身を取れず、背後から大きな岩に叩きつけられた。

「うう、からだが痛い…痛いよお…」

帽子が脱げてしまい髪やパーカーを芝まみれにしても抱えている紫色のポケモンを

チラリと見る。かすり傷は多々あるも、大きな傷は見られない。安心する間でもなく間合いを詰めてくるラツタに、腹部の痛みを堪えた蕾はゆらりと立ち上がって睨む。今、自分が逃げればこの子はラツタに何をされるか。考える間でもなかった。

「この子には…手を出さないで!!あっちいってよ!!」

両手を広げて身体を大きくみせても、ラツタの構える姿勢は止まらない。ラツタの『でんこうせっか』が蕾に近づいた時に、足元から小さな影がラツタの首に飛びかかる。小さく尖った角を衝かれたラツタはたまらずに芝生へと姿を消した。それに感づいたコラツタ達も蜘蛛の子を散らして逃げていった。

「あはは…あなたこんなに強かったんだね。戦ってくれてありがとう」

涙目になりながら、腰を抜かしてしまふ。

「そうだ…手当てしないと…ちよつと待つてて」

リュックを漁る蕾を、退きながらも不思議そうな顔をする。

「ほおら、キズぐすり!」

彼女が何を言っているかは分からなく、片耳を少し曲げてしまふ。ゴワゴワした肌でも腕で包みながら蕾はキズぐすりをかけてあげると、少しピクリと動くだけでおとなしかった。傷も治ったとあれば、あとは一人で帰れるだろう。

「さつきは助けてくれてありがとうね。でもね…気を付けないとさつきみたいに危ない目

に遭っちゃうよ。今度は気を付けてね」

一声かけてからオーキド博士の研究所に向かう。紫色のポケモンは彼女の背中をじいと見つめていた。やがて両耳をピンと立てたポケモンは岩の近くに落ちていた彼女の帽子を前歯で掴み、蕾の向かった同じ道に走っていった。

四

「オーキド博士、戻りましたよ」

「おおーきみか…随分と汚れとるが何かあつたのか?」

髪の毛やパーカーに緑の芝生が絡まり、出かける前より服がほつれていた。どこかで転んだにしては顔や膝の擦り傷が痛々しい。オーキド博士は驚きながら訊ねると、

「ちよつとここにくる途中にラッタに襲われちゃつて」

「なに、ラッタとな!? ここには生息しないはずじゃが…それでは、危ない目にあつたのお」

「あはは、でも野生のポケモンが助けてくれたんですよ!! おかげで、私は大丈夫です!」
「そうか、それはよかつたのう。それは、もしかして君の後ろにいるポケモンかな?」

指をさすオーキド博士に、え、と振り返れば、ついさつきまで一緒にいた紫色のポケモンが帽子をくわえてちよこんと座っていた。蕾が気づいた途端、ポケモンは両耳をピクピクと動かしている。

「あ、わたしの帽子…わざわざ届けてくれたの」

背中や頭を撫でると、キィキィ、と喉を鳴らして答える。オーキド博士は、その様子に目を留めた。このポケモンはニドラン♂。毒の棘を持つ闘争心の強い好戦的なポケモンであり、まだトレーナーでもない少女に懐くとは常識外だ。ポケモンを弱らせてから捕まえるのは、自分より強いと認めさせなければ一緒にいる価値がないと判断されているのかもしれない。

「…だいたい懐いているようじゃな。ここに新品のモンスターボールがある。これで捕まえるといいぞ」

「いいんですか！ありがとうございます！」

だが、蕾としてボールを投げて当てるのに躊躇していた。投げたら痛そうというのもあるし、ただ帽子を届けに来てくれただけかもしれない。紫色のポケモン『ニドラン♂』の目の前まで屈み、モンスターボールを差し出す。

「えつとお、わたしのパートナーにならない？」

ひと鳴きを上げてから、片手をポンと置き——静かにモンスターボールへと収まる。モンスターボールを頬ざると、金属特有の冷たさの他に温かさも伝わってきた。

「ありがとう…これからよろしくね!!」

満面の笑みを浮かべる蕾をオーキド博士は見守っていた。これが夢乃蕾の最高の

パートナーであり、最も信頼を寄せるポケモンとの出会いだ。これから壮大なポケモンの世界が待っている。いつか蕾が花を開く日はくるか、その旅はここから始まった。

2話 ムノーとサイホーン

「ふわあ〜まぶしいい」

トキワシテイからニビシテイに向かう途中で、旅を始めた蕾は、マサラタウンで仲間になったニドラン♂と一緒に、トキワの森を抜けていた。道中に会った蟲使いのトレーナーや近所の子どもとポケモンバトルを行い、蕾はニドラン♂がどういう技を使い、どんなポケモンを知るきっかけにもなり、少しずつ自信を付けていた。

「ニーちゃん、今日はこのままポケモンセンターに寄ろうか」

蕾の言葉に片耳を動かす紫色のポケモン『ニドラン♂』こと『ニーちゃん』は小さく鳴いて、身体を伸ばす。モンスターボールの中はポケモンにとって快適なはずであるも、何故かニドラン♂は積極的には入らず、蕾もニドラン♂が後ろからトコトコと付いてくるから、あまり気にしなくなった。何より、一人で旅をしている感じがしないのも理由の一つだ。

ちなみに、この呼び方はポケモントレーナーとバトルで指示を出すときの呼び方から始まる。いつまでもそのままの呼び方をしては、どこかポケモンとの距離を感じてしまいい、よそよそしさもあったからだ。

ニビシテイのポケモンセンターに到着し、ニドラン♂の健康状態を確認する間に椅子で休憩していると、後ろからじいと見ていた男の人に声をかけられた。旅を始めてから、こういう事態には慣れていても、蕾の場合は自分の言葉だけに集中してしまい、相手に合わせることをおろそかにしてしまう。ようは、深い会話に慣れていない証拠だ。

「お嬢ちゃん、お嬢ちゃん。この街で見ないものだけど、旅のトレーナーかな？」

「はい！ここには来たばかりなんですよ」

「ち、ち、ち。それなら、あ・な・た・だけにいいお話があるんだよ」

「いいお話ですか？それって、どんなことですか!!」

「このジムリーダーは岩ポケモン使いでな。戦いに有利になる秘密の水ポケモン『コイキング』がなんと、たったの1500円!!どうかかな？」

男の人は右手で人差し指を伸ばし、左手を広げて水ポケモンの優位性を言う。固い身体を持つ岩ポケモンと戦うにも、ニーちゃんに頑張ってもらっただけでは、可哀想な部分もある。値段はキズぐすりやモンスターボールよりも高値ではあるが、それ以上に旅はまだ始まったばかりであり、一匹でも仲間を増やしたかった蕾には悪くない話に思えた。

「いいんですか!!買います!」

「毎度あり!!ちなみに、ポケモンの返品はお断りだよお」

男の気前良い声に、蕾は不審に思うも、初めての水ポケモンに笑顔でお礼を言った。相手の良い所だけを見て悪い所を余り見ない性格は彼女の長所でもあり、欠点でもあった。

一

トキワの森には紫色のポケモンが岩のひんやりとした感触を味わいながら、蕾とコイキングの私闘に、あくびをしている。野生のポケモンであるさなぎポケモン『トランセル』と地面に跳ねているだけの『コイキング』。お互いに硬調状態で一人、あわ踊りに似た動作で指示を出している蕾は困り果てていた。

「ええ……この『コイキング』って子……跳ねてばかりだよ。全然、戦ってくれないし」
コイキングをモンスターボールに戻してから、蕾は戦ったトレーナーにコイキングのことを聞き始めた。やがて、疲れ果てた顔で蕾はニドラン♂の休んでいた岩に背もたれる。岩から降りたニドラン♂は、そっと蕾の隣に座った。

「ニーちゃん。他のトレーナーさんにも聞いてみたけど、『泳げない』『最弱』『似ても焼いても食えない』って……散々な言われ方されていたよ」

蕾は首を竦めて、岩場に寄り添う。だが、口調は落ち込んで見えるように見えず、コイキングの散々な言われ方の部分を癪に触っている感じであり、視線だけは真剣な目をしていた。

「大丈夫、私はこの子を見捨てたくないの。私なんかね、モンスターボールを投げるのは下手くそでちっとも上手じゃないし…ママからいつもおっちょこちよいで落ち着きのない子ねって言われているんだよ」

ニーちゃんの頭を軽く撫でていくと、ニドラン♂も蕾の手の平に頬ずる。

「ようし!!まずは仲良くなる所から始めるよ。川で遊びながら泳ぎの特訓だー!!」

トキワの森の付近にあった川を思い出して、目的地へ真っ直ぐに向かう。小川に着いた蕾は服を脱ぎ捨てて、その陽に緑色のビキニにフリルの付いた水着の肌を晒す。水遊びをしたくて服の中に着込んでおいたものである。

「行けーコイキング!!」

モンスターボールを開いて現れたコイキングは、川の貯水された浅瀬でバシャバシャ跳ねながら水を飛ばしていくのを、ゆつくりと身体を持ち上げて浅瀬で身体を支える。その様子を眠たげながらも、ニドラン♂は達観しながら周囲を見回していた。

トリポケモンは上空から跳ねてばかりのコイキングを餌と認識して捕まってしまう話からニーちゃんには警戒を任せた。もちろん、水遊びもしながら楽しむのも忘れない。

「焦らないで…まずはゆつくりと浅瀬から水に慣れていこう」

水ポケモンに水に慣れてもらうのも変な話かも知れない。だが、このコイキングはど

うも野生のポケモンよりも泳ぎが上手でない気がした。蕾の胸までの深さでも、胸びれと背びれを動かかせない部分から、そんな感じがあるのだ。

「そうそう……まずは浅瀬で身体を起こして……バランスはこんな感じだよお」

コイキングのザラザラした鱗の感触は固い鎧の様であり、水で柔らかくなつた皮膚では手を斬つてしまいそうであつた。両手で身体を垂直にしてゆつくりと水しぶきを少なくする泳ぎ方を教える。途端に、ニーちゃんの「キィ！」の声を聴き、空を見上げればポツポにしては身体の大きいポケモンが、コイキングを目掛けて突進してきた。

「この子はエサじゃないよ!! ニーちゃん『つのでつく』!!」

浅瀬で水遊びをしていたニドラン♂は蕾の声に反応し、水面から陸地に飛ぶ。両足を蹴り上げ、突進したポツポの無防備な横を角でくいこませた。痛みに耐えきれなくなつたポツポは、そのまま逃げる。

「ニーちゃん、ありがとね!」

たまに襲いかかってくるポツポやオニスズメをニドラン♂で追い払いながらコイキングの泳ぎの練習を続けていく。その進化形体のピジョンやオンドリルの場合は、ニドラン♂が一段と甲高い声を上げてくれたお蔭で、コイキングをモンスターボールに仕舞つてからバトルを繰り返していた。

そんな時間を過ごして一週間。コイキングは中流でも泳げる様になり、新たに跳ねた

衝撃でポケモンに攻撃するボディータック戦術をくりだし、野生のポケモンと戦えるまでに成長した。

ニーちゃんも『どくばり』から少しずつ強い毒に慣れていく戦闘を繰り返すうちに、自分より大きなポケモンにも強い毒性で立ち向かえる程にはなった。まだ自分の毒を上手く扱えずに、先から滲み出る粘着性のある紫の液体を地に零してしまいう体質があり、ポケモンバトルでは『どくばり』からの直接勝負を得意としていた。

「…うん…これなら、次の街に向かつて大丈夫だね。もっと、いろんなポケモンと会いたいなあ」

蓄もポケモンが強くなるのが嬉しい反面、彼らと仲良くなれていくのが楽しかった。詐欺に近い金額でコイキングを買うも、泳ぎの成長や固い鱗を工夫した戦い方の出来るこの子の可能性の高さに、苦い思い出も些細に感じた。むしろ、また会えれば男性に対して感謝を伝えたいほどである。

だが、蓄はすっかり忘れていた。何故、水ポケモンを手に入れたかを。

二

「次の目的地は…うん、このタウンマップ見にくい。こつちが…北だから、えつと…」

ニビシテイから次のハナダシテイに向かう道を、タウンマップを上下左右に持ち替えながら歩いていった。

「そのの、君！君はポケモントレーナーだろ？」

「はい、そうですよ」

「いま、ニビシテイのムノーさんが対戦相手を探していてな…ちよつとついて来てくれ」
考えた末、二つ返事に付いていくと、ニビシテイジムリーダー『ムノー』強くて固い石の男の看板がある建物まで案内される。

「そういえば…君はトレーナーを初めてどれくらいになる？」

「ふえ。ちよつと二週間くらいですかね」

「それではジムバッチを一つも持っていないか。今さらだが、ムノーさんが相手をしてくれるかどうか」

案内役をした男性も蓄のトレーナー歴を聞き、苦笑せざるをえなかった。受付の付近にいた茶鬚を顎に生やした男は軽快に、男性と蓄の二人を見る。白いシャツに、濃い緑色の作業着のようなズボン。作業場の人の様な格好をしていた。

「それくらいは構わんよ。ジムリーダーが見たいのは、そのポケモントレーナーとポケモンとの相性だからな」

「ムノーさん新しい挑戦者を連れてきました」

ジムリーダーと聞いた蓄は、勢いのまま頭を下げてしまう。恰好がみずぼらしかっただけで、人を判断していたことは、彼女にとって恥ずかしいことでもあったからだ。

「いいだろう。君、ジム戦は初めてかな？」

「はー」

ジムのバトルフィールドはゴツゴツとした岩。上は照明の明かりが眩しく、いつの間にか観客席には見物人もいた。フィールドの端まで距離を取ったムノーと蕾。中央には赤と白の旗を持った審判の人が立会人となる。

「これより、ジムリーダー『ムノー』とチャレンジャー『蕾』の試合を始めます」

「ではこの二匹で相手をしよう。こい！『イワーク』」

「だったら私は…いけ！『ニーちゃん』」

いわへびポケモン『イワーク』の高さは8メートル以上。ニーちゃんとの体格差は圧倒的だ。初めて対峙する大型のポケモンにも、ニドラン♂は砂を足払いさせる余裕も持ってみせる。その態度が勝機は大型だから勝てない訳ではないことを、ツボミ自身も感じていた。

「イワーク『たいあたり』！」

「ニーちゃん『どくばり』！」

イワークのたいあたりを、飛び越えたニドラン♂は口からどくばりを発射する。無数の針を遠距離から放たれれば、接近戦主体のイワークは本来の力を出し切れない。全身の長さを活かしたイワークならではの方法で、ムノーは遠距離に対抗する指示を下す。

「イワークよ！尻尾で叩きつける！」

「ニーちゃん！避けて！」

地面を叩きつけた衝撃で小石や砂霧を舞わせるも、ニドラン♂は大きな石を壁にしてやり過ごす。イワークは全身が一つ一つの大きな石をくつついた姿をしており、尻尾を霞めただけでも相当なダメージを負ってしまう。だが、そんな体格だからこそその弱点もある。

「ニーちゃん！そのままイワークの体を昇って!!」

イワークの身体を軽々と飛びながら登っていくニドラン♂。そんなイワークは小動物を振り払おうと身体を振り回したり、尻尾で小石を飛ばしながら自分の身体に当てていくも、ニドラン♂は小石を避けて頭上まで登り切る。コイキングとの泳ぎ特訓で周囲を見渡す練習が役に立った瞬間だった。

「今だ!!『にどげり』！」

イワークの顔面に目掛けて蹴り上げ、二回目は叩きつける。巨体は傾き、地面にのびたイワークの衝撃で砂埃が舞う。

「おおイワーク！」

「イワーク、戦闘不能!!」

審判の判断でムノーはイワークをモンスターボールに戻す。まだ一匹目ではあるも、

あのニドラン♂と少女には確かな信頼関係があった。イワークを昇るという発想に攻撃を避けるまでの動作。状況を判断する者と現場から判断する物。二人の相性の良さを垣間見たムノーは思わず、口元を上げる。

三

「ふむ…中々やりおる。ワシのとおっておきを出すとするか——ゆけ！『サイホーン』」

とげとげポケモン『サイホーン』の高さこそイワークに劣るも、鋭い目つきと角に大きな身体は相手にプレッシャーを与える。だが、サイホーンの姿に観客席はどよめく。

「ムノーさん、本気かな？」「いつものポケモンじゃないのか」の声は、当然に蕾にも聞こえているが、蕾はそれどころではなかった。

（私のペース、私のペースでいけばいい…）

自分の判断とポケモンを信じる。相手がどれだけ強大でも、自分が慌ててはいけない。少ない経験でもニーちゃんの戦いを不安にさせることだけはしたくなかった。

「それでは、試合始め!!」

「サイホーン！『つのでつく』」

「ニーちゃん！こつちも『つのでつく』」

互いに駆け出したサイホーンとニドラン♂の角を突き合わせても、衝撃を相殺したかのように駆け抜けてしまう。

「サイホーン！『ふみつけ』」

ニドラン♂にめがけて前足を振り上げるも、小回りの利く身体を簡単には捉えられずに、地面をめり込ませてしまう。その衝撃は遠くに離れていた蕾がバランスを崩してしまいう揺れを起こす。

「接近戦は不利かな？それなら…ニーちゃん！『どくばり』」

遠距離でも攻撃のできるどくばりをサイホーンに与えていく。だがふみつけを避けるだけでなく、慣れない地面の揺れでの戦いはニドラン♂の疲労を蓄積させる。少しふらつきがあったのを見てから、蕾はボールを向ける。

「戻ってニーちゃん！——行くよ！『コーちゃん』」

ボールに戻したニドラン♂から入れ替えて、新たに『コイキング』こと『コーちゃん』を繰り出す。相変わらず、地面を跳ねているだけであるも、蕾はある確信めいた直感を信じて出した——が、

「あんなポケモンに何ができるんだろ？」「あれって、コイキングだよな。あんな弱いポケモンをジム戦で使うなんて」などの観客からのヤジが目立つ。一方のムノーは、一瞬だけ驚くも、蕾のコイキングを見る目は真剣であり、そんな気も失せていた。

「サイホーン！『ふみつけ』」

「コーちゃん！思いつきり『はねて』」

本来は一メートルを飛ぶのがやつとのコイキングでもサイホーンの高さより跳ねあがる。ゴツゴツとした背中でもコイキング一匹分の隙間はあったそう。バタバタと跳ねるコイキングをうつとおしいと思い、身体を跳ねて身体を動かすサイホーン。お互いに『はねる』勝負になるも、蕾はコイキングにエールを送る。

「コーちゃん！その調子だよ！そのまま、サイホーンの上で跳ね続けて!!」

「サイホーン、落ち着け!!そのまま体を横に倒すのだ!」

サイホーンもムノーの声で跳ね飛ぶのをやめ、身体を横にしてコイキングを地に落とす。コイキングも跳ね続けたせいか、地面で跳ねる力は弱々しいものであった。

「お疲れさま、コーちゃん。いっくよー『ニーちゃん』」

コイキングをモンスターボールに入れ替え、再びニドラン♂に交替する。

「いくぞ、サイホーン!『つのでつく』」

「真つ向勝負だよ、ニーちゃん!『つのでつく』」

二度目の衝突に会場は一瞬だけ静まり返る。数分にも感じる硬直状態の時間——サイホーンはゆっくりと前足を折りたたんで座り込む。

「サイホーン戦闘不能!ニドラン♂の勝ち!よって勝者、チャレンジャー蕾!!」

「やったあ!やったよお!!ニーちゃああん!!」

蕾はニドラン♂に駆け寄って抱き上げる。サイホーンに状態異常を回復するアイテ

ム『なんでもなおし』をかけてから、モンスターボールに戻し、ムノーは歩み寄る。

「最初の『どくばり』でサイホーンを毒にさせ、コイキングに入れ替える作戦。見事だったぞ」

「えへへ…でも、ニーちゃんとコーちゃんのお蔭です！」

「久しぶりにいい試合をしたわ。君にはジムリーダーが認めた証、グレーバッジを進呈しよう」

「わあ、すごくきれいな…ありがとうございます」

バッチを事前に用意しておいた箱に大切にしまい、それをリュックに入れる。蕾はムノーと審査員の人にお礼を言い、ニビジムを後にした。

四

蕾が出た後のジムは慌ただしかった。イワークで小石や地面を整備するだけでなく、サイホーンによるふみつけの跡でフィールドはデコボコしていた。いつもなら、イシツブテか二体目のイワークを出すのだが、サイホーンは滅多に出さないので難航していた。ムノーは整備員の人と一緒にフィールドの、特にサイホーンで出来た跡を綺麗に掃除していれば、審査員に茶化されてしまう。

「惜しかったですね。まさか、サイホーンが負けるとは思いませんでしたよ」

「ワシもまだまだということだな。いつそ、ワシも旅を試みたいわい」

「ご冗談を…それにしても楽しそうにバトルしていましたよね」

「ふっはっは！若い者の成長を見るのは楽しいものだ」

彼はしばらく黙ってから、やがてこちらをゆっくりと見ると、

「それに、あのコイキングとニドラン♂の戦いは面白かった。コイキングはサイホーンより高く跳ねておったわ。特に、ニドラン♂だ。ワシのサイホーン相手に突き飛ばされない身体の使い方は目を見張る物がある。それにトレーナーを良く信頼した動き方をしおった。あのポケモン、将来有望かもしれんぞ？」

サイホーンによるふみあとをたしかめながら、先の戦いに想いはせ、ムノーは地面を整備していった。

五

「ポケモンセンター、ようし。さてと、ジョーイさんに聞いたけど、ここから近いのはハナダシティかあ。まずは、お月見山を通って…」

次の目的はハナダシティ。そこに通るまでのお月見山。そこには、どんな出来事があるのか。蕾は次の目的地に想いを乗せて、歩いていく。

3話 お月見山での大騒動

ニドラン♂とコイキングの活躍で無事にグレーバッジを獲得した蕾は、次の目的地であるハナダシティに向けてお月見山を探索していた。湿地した洞窟にこうもりポケモン『ズバット』やがんせきポケモン『イシツブテ』が生息する場所である。足元のおぼつかない場所に石とイシツブテを間違えて蹴り躓いてしまい、怒らせたイシツブテに襲われた悲鳴を上げてズバットを呼び寄せて逃げるトレーナーが後を絶たない。集団で襲ってくるズバットの牙には毒を持ち、下手に刺激してはいけないのは熟練トレーナーのお約束になっている。

蕾も足元に注意しながら歩いていく。ニーちゃんは洞窟を出るまでモンスターボールにおとなしくしてもらっている。しかし、偶にイシツブテを素通りすると、カタカタ鳴らして出てきそうになる。そんな時は、軽く手を添えるところにおとなしくなるが。

「トレーナーでしょ？バトルしない？」

立札の陰からひよっこりと女の子が現れる。濃い茶色髪に緑を強調した厚手の上着に短パン。気づかぬうちに声をかけられたら驚くが、蕾は、身体をピクリとしただけで笑顔だ。急な誘いでも、動揺している様子はみられなかった。

「いいよ。私もちやうど戦いたかったから！よろしくね」

にっこりして蓄は言い、二人同時にポケモンを出す。女の子はふうせんポケモン『プリン』に対して蓄は『コイキング』を出す。

ピンクの丸いボディに愛くるしい『プリン』は見た目と裏腹に歌唱力と肺活量はトッポウラスのポケモンだ。ポケモンセンターでは子どもと女性の天敵である夜更かし防止で決まった時間にうたわせて眠気を誘う看護師ポケモンとしても活躍している。

勝負は一瞬だった。相手のプリンは普段から戦い慣れないのか、コイキングをペチペチはたくのみであり、見かねたコイキングははねた勢いで尻尾を捻り、プリンの頬を引つ叩く。頬を腫らして泣きながらトレーナーの元に帰ってしまい、互いに指示をだす前に決着がついた。

「ああ…もう！友達ともはぐれちゃうし、ツイてないわ」

「ふええ…そんなこと言われても…」

※蓄はとぼつちりを受けた。もちろん、彼女はコーちゃんにそんな指示を出していない。

「いいわよ別に…あんたのせいでもないし、意外とお月見山は迷いにくいだよ。友達もすぐに見つかるから」

近くにあった小石を放り投げて言う。

「あのお。何でこんなにトレーナーが多いんですか？お月見山って、そんなに有名な場所なの？」

新人らしきトレーナーや山男の使うつるはしを持つ人の多さを、彼女は知っているのか、蕾は言った。

「あら、知らないの？お月見山は、最近になって『月の石』が取れるってテレビや雑誌に取り上げられたのよ。珍しいから高値でも売れるし、一攫千金で取りに来るトレーナーやマニアは多いのよ」

「そうなんだ…どおりでつるはしを持ったトレーナーがいたんだ。ずっと変だなんて思っちゃったよ」

「なんかトロクそうね、あんた。『月の石』を知らないなら、何しにお月見山に来たの？」
冷ややかに問いかける。

「えつと…ハナダシテイに行きたくて…そのジムリーダーに挑戦したいんだ!!」
「あんたが!？」

意外な声を上げてしまう。彼女は友達とはぐれた気晴らしに蕾とバトルをしたが、自分よりも幼い雰囲気で幼児体型。ポケモンジムに挑戦するにせよ、彼女は目つきが悪くて格闘家の様なマツチョイ体形をイメージしていた。どう鼻屑目で見ても、気弱な彼女にそんな願望を連想出来ずに否定してしまう。

「…そんなにはつきり言わないでよ」

「ご、ごめんなさい！悪気があったわけじゃないわ」

肩をがっくりと落としてしまい、目を細めてしまう蕾に彼女は慌てて言いなおす。自分を肯定したくて話したくないが、まるで言い訳みたいな言い方をする。

「お詫びじゃないけど、いいこと教えてあげる。お月見山は『月の石』だけが有名じゃないの。満月になるとようせいポケモン『ピッピ』がくるのよ。それに集団で踊っているのを見たトレーナーに幸せをもたらすと言われているわ」

「すごいロマンチッククウ!!私も見れたらいいなあ」

※蕾は意外と俗っぽいおとぎ話は好きだった。

「滅多には見られないわよ。よっほど運が良くないとね」

「教えてくれてありがとう。私はもう行っちゃうけど、友達と会えるといいねー」

太陽は北を向いており、日の出から半分しか経っていない。満月までの夜には何時間も待たなくてはならないも、彼女は運が良ければピッピを見たい位の気持ちでいた。彼女はリュックを左右に振り、少し速足気味でお月見山の深淵部まで潜っていった。

一

お月見山の最深部に辿り着いてみると、ここにポケモンたちが踊れば一つのステージになるかもしれない。陽に照らされた丸い天日に先の尖った大きな岩。夜の月明かり

をスポットライトにピッピ達の踊る姿は、一層、人を惹きつけ、幸せに似た出会ったことのない様な感動を与えていただろう。

「ふわあ……こんなに大きいんだ!!夜になつたらきれいだろうな〜」

ピッピ達の踊る姿を思い浮かべる蕾の瞳にシイタケ柄を浮かべた。もし、ここにお目当てのポケモンが現れでもすれば、目から『キラキラこうせん』を発動させ、相手のポケモンを一瞬だけ固まらせることだろう。眺めていると、どこからか怪物の音が聞こえた。時間はちょうど12時を過ぎている。ここにきて、ようやく蕾は空腹に気づいて、失笑してしまった。

「もうお昼に近いのかな?せっかくだし、ここでご飯にしよう〜!」

時計を持ち合わせていない蕾はお腹の音で食事する時間を決めていた。

「今日の〜ごっつはんは、サンドイッチ〜たまごにレタスにベーコンさ〜ん♪」

鼻歌交じりに風呂敷を開いたバスケットには野菜と肉のたっぷり挟んだサンドイッチである。手作り弁当をつまめば、ベーコンの油を包んだみずみずしいレタスのあつさりとした食感。口腔に爽やかな油を残したまま、卵入りを頼れば油気は卵と混ざり、サンドイッチの最高の出来栄えに身体を揺らしていた。

「あともうひと箱の分も半分たべちゃおう。こんなに美味しいんだもん。残りは皆にあげるよ」

バスケットに手を伸ばすも、何も掴めずに空をきつてしまう。振り向くと、少し離れた所でピンク色のポケモンが両手でサンドイッチを食べていた。

「このサンドイッチうめー!!でも、もうちつと塩気が欲しいッピね」

「うわあ、私のサンドイッチ!なんで食べちゃうのお〜」

「いいだろ、僕も久しぶりに人間の食べ物欲しかったッピよ。この愛くるしい見た目で許してッピ!」

改まって語尾にピを付けるポケモンの全体像を眺める。大きな眼に太い眉毛に合わせ、横に膨れた身体は相撲取りを思わせる。特徴は異なるも、これがようせいポケモン『ピッピ』だ。蕾の知るピッピの様な愛くるしさはなく、がさつと凶々しい性格なのは一目で分かった。それ以上に一番の驚きは——人語を喋るポケモンが、いま、目の前にいることだ。

「——うわ!このピッピ喋ってる!!あとあんまり可愛くないよ」

「失礼な奴ッピね!!僕は腹が減つてんだ!残りのサンドイッチも寄越せッピ!!」

「ひい——『ニーちゃん』お願い!!」

まるでサンドイッチは自分のものとしている調子で襲いかかってきた。反射的に手に沿えたモンスターボールを投げる前に、ニドラン♂が飛び出す。

「ニーちゃん『どくばり』!!」

「ギーイー!!イタタタッ!!」

鋭い針を刺されたピツピが地面を転がりながら、洞窟にだみ声を響かせる。お月見山の小石で敷き詰められた地に顔ごと擦れば石がくいこむ。毒の痛みに解放されて立ち上がれば、鼻から血を出してニドラン♂をにらみつけた。

「なるー!!ならこつちは『工事屋の頑固親父』で攻撃っぴー!」

「どこから出してきたの!?!」

「これは、僕の武器ツピよ。親父さんは昨日とは違う。今日の親父さんは一味違うツピ!!」

ニーちゃんの身体は自分の毒を制御できずに滲ませるほど強いも、ピツピの頑固親父のヘルメットで頭突きをしたり、振り回す攻撃にニーちゃんは気後れしてしまう。蓄は毒のトゲに触れない思いがけない攻撃に、焦りから短期戦での決着を付けようとした。

「ニーちゃん『つのでつく』!!」

「効かないツピよ。『頑固親父のヘルメット』でブロック!」

頑固親父の付けていたヘルメットを外す。ニドラン♂の角をヘルメットで防ぐも、強度に耐え切れないヘルメットは角を貫通してピツピに刺さる寸前で止まった。事前に伸ばしておいたベルトをニドラン♂に巻き付けて拘束し、突き刺さったヘルメットを外そうと、首を振り回する様子を、蓄は呆れきったように嘆息した

「さつきからずるい攻撃ばかり…こんなの絶対おかしいよ」

「僕は真面目ツピよ!!なら本気をみせてやる!!はああああ——」

足を広げ、手に力を込めて呼吸を整える仕草をするピツピに、蕾も身構えてしまう。これまでの常識が通じない相手に恐怖を感じる。これからどんな攻撃をするのか。ピツピの動きを見つめていると、ピツピは蕾の横を通り過ぎ、バスケットに入ったサンドイツとの距離を詰める。

「秘儀!!『一気食い』ツピ!!」

「ああ!!皆の分のサンドイツが!」

大口を開けて残りのサンドイツを一度に口に放り込んでしまう。口に食べかすを残したまま、満足げにゲップをするピツピの顔は得意顔だ。

「数日何も食べていない時にだけ発動する僕の必殺技ツピ」

「それはもう技じゃないよお…」

ポケモンの技とかけ離れた攻撃をするピツピに技の概念が崩壊しかける蕾は、ふいに、理不尽さと惨めさに泣いてしまう。これを攻撃と認めないピツピは激怒して頑固親父を掲げるも、ボールから出たコイキングと駆けつけたニドラン♂に進行を止められる。二匹は同時にたいあたりを行い、ピツピを頑固親父ごと洞窟の奥にふっと飛ばした。

「ギーイー!!よくも僕をコケにしてくれたツピね…覚えてろー!!」

完全な闇の中でピツピの叫び声が反響する。ようやく恐怖から逃れた、というだけのことでは食欲を忘れるほどに心細かった。それでも、トレーナーの義務で助けてくれたニドラン♂とコイキングをあやす。

「…喋る太ったピツピなんて、忘れたくても忘れられないよ」

喋るピツピの恐怖に落ち着くまで、蕾は、ここになってあれがようせいポケモン『ピツピ』だったのを忘れていた。あの太ったピツピが20か30匹で踊り、歌う姿を思い浮かべた光景は蕾の許容範囲を超えていた。これ以上は、胃の中身をありったけに逆流させてしまおうだろう。不快さに気分が悪くならないうちに、ハナダシティへと向かった。

二

お月見山を無事に下山できた蕾は、両手を広げて背伸びする。洞窟に入る前とはうってかわって、また成長した様な気もした。蕾は大きく息を吐いて、喋るピツピを意識しないようにしながら道路を歩いていた。

「なんだが、どっと疲れちゃった。早くシャワーでも浴びて、宿屋のベッドでゴロゴロしたいよう」

歩きやすい路道を歩いているとはいえ、気分のさえない重い足取りのままでは、ポケモンバトルをする負担も大きい。大元はあのピツピの戦い方にあるだけに、今日だけは

バトルはせず、気分転換に旅の準備の買い物をしたかった。

「ポケモンのきのみだけは探そうかな。ニーちゃんはナナの実は好きなんだよね。コーちゃんは…何の実が好きだろ？」

木や茂みに隠れたきのみを手探りで辺りに触れていく。バナナに似たピンクと黄色の混じったナナの実は木にぶら下がっている。たまに茂みに隠れて育っているのは完熟性が高くて美味しいのだ。

「多く取れたらミルクと一緒にまぜまぜ…名付けて『モーモーバナナ』！お店に出せるかも」

きのみとドリンクを混ぜたデザートもときな未知の味は、きつと甘くて美味しいだろう。奇抜さよりもシンプルな味で家庭でも馴染みやすい物売れば、浮いたお金でおこずかいも増やせる考えをしていた。ただ旅をしている身であり、お店で売るよりかは味のレシピを作るほどで留める気である。

「あれ——これだけフワフワ？何だろう…」

大きな茂みに伸ばした手になでやかなふわりとした毛並みは自然な感触とは程遠い。茂みを避ければ、その毛並みの正体はポケモンだった。寝込んでいるポケモンの状態が、蕾を不安にさせた。小さく痙攣させたその身体に、炎や雷を漏れいさせ、口から水を吐いている。

「え!? 君、大丈夫!!」

見たことのないポケモンであるも、炎タイプに電気タイプや水タイプ技を同時に出す症状の異常さに動じてしまう。だが、どこからか大声を出し、茂みを荒々しく薙ぎ倒す音に、その動揺さも消え失せてしまう。こんな可愛いらしいポケモンが、関係が無いとも言いきれない。何か事情があるのだろう。

「なんだか分からないけど……この子を助けなくちゃ!」

この子を探しているのかは分からない。しかし、荒々しい探り方や怒声ある殺伐とした人たちにポケモンを渡せないと考えた蕾はタオルケットに毛玉のようなポケモンを包み、上着で隠す。不自然に膨れたお腹は、山登りをする格好に大きなりユックを背負った姿から、違和感はほとんどない。

「おい!ここに、茶色くてフワフワした毛並みのポケモンを見なかったか?」

「何のことですか? そんなポケモンは知りませんよ」

嘘の苦手な蕾にとっては、器用な誤魔化し方はできない。本人は声を平静に保つのが精一杯だった。眼鏡をかけた痩せ型の男はじろりと一瞥して舌打ちをする。

「ちい……ここにいないか」

「ほっとけ!草の根を分けても必ず探し出せ!!」

大人達が離れてから、改めてシャツ越しに隠したポケモンの様子を覗きこむ。身体か

ら今度は、氷の結晶に黒い靄を澱ませ、口に伸びた蔓を吐き出していた。ただの毒や麻痺の症状であれば、どくけしやまひなおしで済むならともかく、ここまで複数の症状を診てもらえる場所は、一つしか知らない。

「出てきちゃダメだよ。ここは窮屈だけど少しだけ我慢して。すぐにポケモンセンターに連れて行くから」

と、あやしながら言う。

「大丈夫だよ。怖い人はいないから安心して」

彼女はポケモンセンターのドアを開けて声を張る。

「ジョーイさん!!この子をお願いします!ひどい病気なの!」

上着に隠したポケモンをおろして、ジョーイさんの前に診せれば、そのポケモンの瘻は弱々しいものになっていた。ポケモンの看護に長年関わった者でさえ、瞬時に顔色を変えるも、蕾と話すときは落ち着いた顔をする。

「分かりました!すぐに診ますね!」

「お願いします!その子を助けて下さい!!」

すぐに治療室に向かうポケモンは移動式ベッドの上でも変わらずに、室内へと消えていく。蕾はエントランスから、ジョーイさんがベッドを移動させて中に姿を消すまで、じっと見送っていた。

4話 新種の遺伝子！イーブイ！！

翌朝、ポケモンセンターに泊まった蕾が、ジョーイさんに預けたポケモンの治療を待っていた。蕾はまだ、ポケモンの治療のことはよく分からないし、専門知識もない。ポケモンに関する本をかじった程度であり、それを実践できる勇気はないが、それでもあのポケモンのだしていた、様々なタイプの属性を出してしまう症状など、どれも思い当たらなかった。

日も昇った時間帯に…治療中…のランプは消灯して現れたジョーイさんに蕾が近づく。

「ジョーイさん」

蕾は心配さを抑えきれずに尋ねた。

「大丈夫です。あの子の一命は取り止めましたよ」

「はあああ〜良かったあ」

「ひとつ、聞いてもいいかしら？あの子は貴方のポケモンなの？」

「違いますよ。きのみを探したら、たまたま見つけたんです」

「では、あのポケモンの名前も何も知らないの？」

自分のポケモンで無いにも関わらず必死な形相で懇願していた少女に、これには驚いた顔をしたが、ジョーイはあのポケモンの生態を簡単に伝えた。

「あの子はいんかポケモン『イーブイ』と言うの。この辺りには生息しないポケモンなのよ」

「そうだったんですね。見たことないポケモンだったから、驚いちゃいました」

「すぐ別のポケモンに変わってしまうからイーブイとしての姿は珍しいのかもしれないわね。でもどうしてイーブイを持っていたの?」

少し視線を泳がせながらも、蕾は感想を述べた。

「私のポケモンじゃないんです。本当なら私が連れてつちやいけなかったと思うけど、あの人たちには預けたくなくて」

「それってどんな人たちでした?」

「えっと…白衣を着た眼鏡の人でした。ただ、すごく怖い人たちで…なんだかあの子を心配して探している感じがしなかったから」

「最近この辺りで研究している人達ね。でも、何か気になるわ——念のため、入院してイーブイの精密検査をしてもいいかしら」

ジョーイは言い、手を頬に沿えた。

「はい。ぜひお願いします」

ジョーイに言われて返事をする。ハナダシティのジムに挑戦するには気が散ってしまい、このポケモンが安全と分かるまで傍にいるつもりでいた。

—

ポケモンの集中治療室のカプセルで身体を小さく丸めたイーブイは大人しくしていた。

「どう、イーブイ？調子は大丈夫かな？」

朗らかに気遣う少女の声に顔だけは向きを合わせるも、すぐに丸くなってしまった。ただ今は仲良くなれるのは重要ではない。必要なは無理に関わるのではなく、いちポケモンとして元気になれるかだ。

ジョーイは看護師ポケモン『ラッキー』から手渡させたカルテから、この時間までに現れた技の種類を記録したデータを読み取る。

「こんな症状は始めてね。確認できただけでも草タイプ・悪タイプ・氷タイプ・電気タイプ・水タイプ・炎タイプ・エスパータイプ・フェアリータイプ：イーブイは様々なポケモンに進化できるポケモンだけど…こんなに複数なのは専門家の人に聞いてみないと分からないわね」

「それならオーキド博士に聞いてみます。何か分かるかも知れない」

少し駆け足気味にポケモンセンターのパソコン画面へと向かう。慌ただしい蕾に、

「廊下は走らないように」のスタッフの注意も軽いお辞儀で澄ましていた。慣れないポタンを人差し指で入力すれば、機械的な音を鳴らし、画面にオーキド博士の顔が映る。

「おお、君は蕾だったか?元気にしとるかの」

「はい、博士!この間もグレーバッチを手に入れたんですよ」

「どうやら少しずつトレーナーとして成長しとるようじやな」

「えへへ。あ、そうだった!博士に相談したいんですした」

「ワシに相談とな?」

それからイーブイの状態を知っている限りに伝えた。複数の技を漏えいさせている現状を。ハナダシティには生息していないイーブイのことを。ひととおり伝え終えれば、画面のオーキド博士は顎に手を当てていた。

「ふむ:イーブイが複数の技をだしとるといのか:近くに行つてみないと分からんな。ワシがハナダシティまで行こう」

「え!?マサラタウンからハナダシティまでは遠いんじや」

「なに、心配いらん。すぐに着くから外で待つとくれ」

どうやって来るんですかと思う瞬間、電話機能を遮断してしまう。蕾はしばらく青空の広がる白い雲を眺めてから、思い出した様にパソコン画面を閉じる。結局私にできるのは、待つしかなかった:

「オーキド博士…すぐに着くつて、どうやって来るのかな？」

抱えたニーちゃんのふよふよした肌に顔をうずめて、オーキド博士の到着を待った。透き通った水の噴水に小さなバタフリーが花壇の蜜を飲む穏やかな光景。この穏やかな待ち時間は、旅をしている蕾には、幸せな時であった。

不意に眼を閉じると、立っているのもやつとな風が左右から吹き荒れる力に耐え切れず、ニドラン♂を抱えたまま、天と地をひっくり返してしまう。

「——わきやあああああ！なにになに！」

「おお蕾！待たせたかの？」

逆転したままで上からオーキド博士と目が合う。隣に巨大な羽を持つ恰幅の良いポケモンに気後れしてしまつた蕾を他所に、腕に包まっていたニドラン♂はオーキド博士とポケモンに、今にも襲わんとばかりに威嚇している。

「は、博士…そのポケモンは…」

「珍しいポケモンは聞くよりも実際に見て触れた方がいい。ワシもそのポケモンに興味があつての。早く着きたくて移動用にカイリユウを連れてきたんじや!!」

ニーちゃんの棘に注意しながら、頭や顎を撫でていく。少し身震いをするも、ゆつくりと脱力して蕾の腕に身体を預ける。威嚇していた様子からは想像できないほど弛緩

していた。

「で、でんじやらすじーさんだ…」

移動用にカイリニューを連れてこうそくいどうで飛んでくるオーキド博士に一点、と蕾は心の中で呟く。爆風で花壇から零れた土や噴水の水で濡れた石レンガやその残骸が被害を物語っている。きつとハナダシテイのジムリーダーがこの場を納めてくれるだろうとオーキド博士は、その場を離れた。

「いいのかな…これ」

※いい訳がない。

カバンには液体や電線コードの類を敷き詰めたオーキド博士の用意したポケモンの遺伝子を研究する道具を揃えていた。ほんの数秒で小型のパソコンに紫や水色の多様な遺伝子のホログラムが映し出される。しかし、このプログラムのデータは隣にいたジョーイに違和感をもたらすには十分な情報であった。

「これは極めて不思議だな。イーブイは周囲の環境の影響を受けやすいポケモンでな。ポケモンの中でも極めて不安定な遺伝子を持つせいで一部の鉱石や天体・精神から発せられる放射線から容易に変異し、様々なタイプのポケモンに変わる——つまり進化すると言われているのじゃ。だが、このイーブイの遺伝子はどれにも該当しないな」

「オーキド博士。ではイーブイは遺伝子の属性反発で異常があるのですか?」

「その可能性もあるが、ポケモンは不思議な生き物だからな。ワシらの知らない世界でも当たり前な出来事として起こしておるかもしれない」

知らない世界、の言葉にいさか引つ掛かりがあった。何か別の見解があるのだろうかと考え、しかしそれ以上は憶測を試すわけにいかず、軽く顎を引く。

「ワシもイーブイの精密検査をしても良いじやろうか？」

「オーキド博士がいるなら心強いですね。お願いします」

そう言い、役割を分担して器具を取り付けたイーブイを調べた。

三

私は誰なんだろう。何で人間がいるんだろう。何で人間は私を傷つけるんだろう。役に立っていないからかな。あの人たちは何をしているんだろう。私は誰を恨めばいいんだろう。

ここまで逃げてきたのにまた戻るのかな——もう、戻りたくない。あの暗い場所に戻りたくない。どこへ向かえばいいのかも分からず、明るい世界も不安で暗かった。世界は広いはずなのに、私はひとりぼっちで——消えちやうのかな。

…そういえば…私を助けてくれた子は誰だったんだろう。覚えてるのは陽のように暖かい声と温もり。だめだ——思い出したら眠くなってきた。寝たらダメ…まだ気を強くもたないと。

茶色いポケモンはじいと機械音に聞き耳を立て、二人の様子を観察していた。

四

高く昇っていた太陽も落ちて夕焼けに差しせまる。床を踏みしめ、軽く辺りを見回しながらコイキングやニドラン♂と遊ぶ蕾。だがオヤツのきのみを与えている時は、あのイーブイを心配していたからか、デザートを一緒に食べる気はしなかった。本来なら歩き疲れて、オヤツを食べているか、仮眠をするかのどっちかだ。

オーキド博士が現れたのはそんな時であった。疲労に抗いながら目を細めて、オーキド博士からの朗報を待つ。

「待たせたの。イーブイの調子はよくなったぞ」

「ホントですか!?!ありがとうございます」

「それとイーブイの遺伝子を調べとつたら…驚くべき発見があったのじゃー!」

「驚くべき発見?それは何ですか?」

早口にまくしたてるオーキド博士に、蕾は首をかしげて問いかける。

「あのイーブイの不安定な遺伝子の中に、ワシですら見たことのない遺伝子を発見したんじゃー!それも、他のイーブイにはないものだ。もしこれが分かれば、世紀の大発見だ!」

「ふえ…あの子にそんなものが」

蕾のほうでは、ただの一般的なポケモンでしかなかったことが、動揺をより増長させた。

「じゃがの…その遺伝子が何か分からん事には…それまでは何とも言えないの。ワシの知り合いにも見てもらうが…」

オーキド博士は、改めて蕾の眼を見る。

「蕾、君があの子のイーブイを連れて行ってくれないか？」

「え、どうしてです？」

「さっきジョーイから聞いたがの。イーブイを狙っておるのはワシらとは違うはぐれ研究者じゃ。ワシもおろか、他の研究者があの子のイーブイを持つただけで力づくでも奪いに来る。そして、周りの人間やポケモンにも被害をだしてしまうのじゃ」

どこにでもいる一匹のポケモンの希少価値から生まれる事の重要さに気付けば、少女は萎縮してしまった。私はポケモンチャンピオンになりたい。でも、それ以上に危険に巻き込まれてあの子を守っていく大それたことは不安でしかなかった。

「…警察のジュンサーさんは——」

「警察に預けたとしてもあのイーブイの持つ遺伝子の価値を思えば、罪を犯しても奪い取ろうとするじゃろう。頼りにはならないんじゃ」

オーキド博士の否定に、ますます萎縮してしまった。それだけ狙われるポケモンを私

が持っていて大丈夫なのだろうか。蕾は断る理由を必死に考える間もなく、オーキド博士に両肩を掴まれて、正面から向き合う。

「あのイーブイが新種のポケモンであることはワシと蕾だけの秘密じゃ!決して誰にも言ってはならんぞ!!」

「わ、分かりました」

とても断れる雰囲気ではなく、熱気に押されて返事をしてしまい、蕾が正直にうなずくと、

「これからの旅はさらに困難となろう。旅の助けになる道具を渡すぞ」

「博士…これって——」

「ポケモン図鑑といってな。出会ったポケモンを自動的に記録してくれる最先端のハイテク機械なのじゃ。これがあれば、ポケモンの特性や技を調べるのにも役立つぞ」

「ありがとうございます!大切にしますね」

ポケモン図鑑をリュックに仕舞い、少し間が空けば、ポケモンセンターの外から大声で呼びかける女性の声が聞こえた。

「この付近で突風と思われる風が発生しました。危ないですから皆さん、離れて下さい!」

「これはしまった!また何か分かれば連絡するぞ——こい、ラッキー!!」

オーキド博士はそう言ってから、ポケモンを出す。

「さらばじゃ!!ラッキー『テレポート』」

看護師ポケモンでお馴染みのラッキーと一緒に姿を消したオーキド博士。見送った瞬間、どういわけかイーブイの苦しく切なげな表情が脳裏に蘇り、近寄ってきたニーちゃんを抱えて瞳を閉じた。

同時刻。ラッキーによる『テレポート』をしたオーキド博士はどこかの大木の頂上にいた。

「うおおーなぜ木のとっぺんにワープしてしまったんじゃあああああ!!」

「アンラッキー!!」

白髪の初老とラッキーの叫び声が、夕焼けの森林に響き渡った。

五

虫ポケモンの音も静寂に漂う深夜のポケモンセンターで椅子にもたれながら、これからポケモン達との関わり方を考えていた。だが、いくら考えても悪い考えばかりが先走る。不安な気持ちを感じ取ったのか、ニドラン♂は小さく「キィ」と鳴き、モンスターボールのコイキングは小さく震えていた。

「…ニーちゃんとコーちゃんがいれば、何でもできるよね。ごめんね、大丈夫だから」

気を楽にすると眠気に襲われてしまい、イーブイをひとりにさせたくなくなという想

いから、ジョーイさんに同じ部屋で寝る許可を取った。集中治療室の暗い雰囲気は自然の明るさも無く、人工的な建造物に囲まれた暗さは独特な怖さがあった。カプセルベツト上で包まっていたイーブイの様子は変わらず、耳をピクピク立てて子刻んでいる。

「私…怖くなっちゃったから一緒に寝たいな——お休みね」

毛玉の様なフワフワした感触をたしかめてから、冷えた石に寝袋を敷いてニドラン♂と眠る。眠気に襲われて集中していかなかった彼女は気づけなかった。ポケモンセンターに訪れたイーブイが初めて耳をペタンと後ろに倒したのを…

5話 ハナダシテイ！新たななる決意！！

新種の遺伝子を持つイーブイと出会い、ハナダシテイのポケモンセンターで一夜を過ごした蕾は、食堂で朝食をとっていた。ハナダシテイのジム戦を受けてから、次はどこにいこうか。地図とにらめっこをしても浮かばない考えに、途中で空腹に襲われた蕾は、ガラス越しにあるサンプル商品に誘われ、いつの間にか入店していたのだ。

「ん〜このスパゲッティ、あつさりしてて美味しい！ニーちゃんとコーちゃんも美味しい〜」

ニドラン♂も配給されたポケモンフードを前歯でカリカリと食べて小さく鳴き、コイキングは両ヒレで身体を起こして食べていた。一般常識でコイキングの力は弱く、陸地では跳ねるのみで起き上がるのは異例である。蕾はトレーナー歴が浅く、これが異常とは気づいていない。イーブイはポケモンフードに手を付けず、腕を組んでそっぽを向いていた。

「イーブイ、ご飯食べないの？これ、美味しいよ？」

耳を立てて片目を開くも、またすぐに両目を瞑ってしまう。蕾は軽く溜息をついて、外の朝日の入る花を眺めた。

「気が向いたら食べられる様を持つてるね」

小瓶にカラカラと小気味な音を打ち、満タンに詰まった瓶の蓋を閉める。思うだけであるも、一緒に食べたいことを願ってしまう。水だけは飲んでるのは確認したが、もしかしたらポケモンフードは食わず嫌いで食べないのかもしれない。それか、ポケモンフードが合っていないのかもしれない。とりあえずは、お世話になったジョーイさんに挨拶をしに席を立った。

一

洞窟や水流の流れる大きな川にかすみの香りある道のりを、端から端まで歩くとポケモンセンターは、そこにある。緑園と鮮やかな花に迎えられる通りは美しさが顕著にされていた。だが、昨日の突風被害により計算された美しさは見る影もない。そんなポケモンセンターで蕾がイーブイを引き取ることに、ジョーイはさして驚かなかった。

「あなたはこの子をモンスターボールに入れないの?」

「その…イーブイが私を認めてくれたらしたいなつて。無理やりゲットしちやったら可哀想だから。この子が安心できる場所を見つけるまで一緒にいたいんです」

ニーちゃんを腕に抱えたまま、足元でお座りするイーブイを見る。

「イーブイの生息する地域は分かっていますし、そもそもこの子を探している研究者の知らない場所に連れて行かないといけませんよ」

「…はい」

ジョーイは失態を宣告するように言う。

「でも私…この子が安心する場所を見つける力になりたいんです」

口調こそ弱々しい意思から、視線だけは揺るぎない真っ直ぐな眼に、彼女から少女にかける言葉は無い。だがこれからこの新人トレーナーが、ただバトルをするポケモントレーナーよりも厳しい茨の道を歩むのは明白だった。

「わかりました。こちらでは旅の助けになるか分かりませんが、ジョーイ専用のアドレスを教えますね」

「ありがとうございます。ほんのちよっぴりでも、この子の為にできることをしたいんですよ」

「…そうですか。もしかしたら旅の手助けになるかもしれませんね——少しだけ待ってください」

蕾は返事をする前に、言おうとした本人は関係者専用の部屋に向かってしまう。しばらくして現れたジョーイにミキサアの形をした持ち物を手渡された。片手で持てる程に軽く、旅をするにも十代の少女が待ち運ぶには配慮のある道具であった。

「ホウエン地方では有名なポケモンフードのポロックを作るキッドです。説明書もお付けしますので、是非使ってみてください。それと…私があげたのはトレーナーの皆さま

んにはナイショにして下さいね」

「こんなもので、ありがとうございます!」

ポケモントレーナーの中立を扱う立場にあるジョーイの役割から外れた行為。半年に一回はあるポケモンリーグの集会にて集まる情報交換で貰った物である。好きに使ってもよいとはいえ、一人だけ特別扱いをしては他のトレーナーを差別してしまう。内心とは裏腹に、蕾はリュックにある道具を出し入れしてから両手で肩ベルトを引つける。

「でもどうやってイーブイを連れて行こう?一緒に歩くわけには行かないし、抱っこするには目立つよね」

混じり気のない疑問に、イーブイは器用に蕾のパーカーをよじ登り、フードの中に丸くなって収まる。リュックや服に足を蹴る力から左右によるけるも、フードから茶色い耳をピンと動かすたびに首筋のうなじに毛先を刺激された蕾は、慣れない感覚がより刺激される。

「きやつーくすぐつたいよおイーブイ!」

フードのくぼみに丸い毛玉をほぐす触り方をするも、先住民を主張して「ブイ!」の鳴き声で頑なに動かない。ひとまず落ち着ける場所としてモンスターボールの代わりに思うこととした。リュックサックに引掛掛けて歩けば、重さもない。

「じゃあ、行つてきます!」

「はい。お気を付けて」

全身の悦びを表現する直立90度まで下げたお辞儀をする蕾。フードにいたイーブイはコロリと落ちてしまい、怒った茶毛の獣は飛びかかり、布の帽子をお構いなく、怜悯な歯を頭に喰らわせる。

「ブイ——ツブ!!」

「ふにゃああ!!いったあああいいい!!」

慌てて駆け出す蕾を無視し、噛み付いたまま離れないイーブイ。しかし、ポケモン専属の医師であるジョーイからは半ば微笑ましく、半ば意外であった。人を信頼しないポケモンは勝手に離れてしまう。人間の衣類に包まり、怒っても離れようとはしないポケモンがトレーナーを嫌いになってはいないから、もうすでにイーブイは彼女に心を許しているのだ。その様子にジョーイは眼を閉じて、彼女の安全を祈っていた。

二

ハナダシティのジム会場の前には人だかりができていた。彼らは看板よりも話し合っているトレーナーとジムリーダーに注目している。なぜならオレンジ色の髪の毛をボサボサにしたトレーナーに思う所があるのだ。涙目になりつつも鼻をすすり、から元気でぴよんと跳ねる少女におっとりとした様子で青い髪をした女性と向き合ってい

る様な、対照的な光景だった。

「しばらくジム戦はないんです?」

「ハナダシティで原因不明の突風により、建物と民家に被害がありました。ジムリーダーの権限により、周辺住民の安全整備を行います。これにより、しばらくジム戦は臨時休業です。ジム戦の再開は日を改めてお伝えしますね」

「ありや、それはたいへんですね」

原因はあの『でんじやらすじーさん』もどぎの『オーキド博士』によるカイリユウの爆風だ。ポケモン凶鑑には時速約2400kmで飛ぶこともできるポケモンと記録されてあり、それを乗りこなせるオーキド博士は規格外の人間である。知り合いと思われるたくない彼女は必死に他人のフリをするが、何度も額の汗をぬぐう仕草をしてしまう。(ううゝ恨みますよお。はかせえゝ)

※オーキド博士は『危険な他人・でんじやらすじーさん』にランクアップした。夢乃蕾、心の評価。

そんな少女に、柔らかな顔つきで紙を差し出す。

「お詫びでクチバシティに停泊しているサントアンヌ号の招待券を差し上げます」

「テレビでもあった船ですよね?こんな豪華な船のチケットを?」

「ご覧の通り、ハナダシティでのジム戦は行われません。代わりにトレーナーを船に集

めて、快適にバトルをお楽しみできるように企画しました。これはその招待券です」

「いろんな人とバトルができるなんて…それってすごい楽しそう！」

手渡されたチケットを撫で、大切そうにズボンのポケットに折りたたむ。それまでは傍観者を決め込んでいたトレーナー達も我先へと、女性からチケットをねだり、女性の手元にあるチケットは全て完売となってしまう。

ほとんど意識することなく、ニーちゃんに目配せをする。もしかしたら、サントアンヌ号の停泊しているクチバシティで沢山のトレーナーとポケモンバトルで鍛えられるかもしれないし、そこに行けば珍しいポケモンを交換できるかもしれない。自然と足を運ぶ少女を、ニドラン♂はトコトコと付いていった。

三

先ほどの女性ジムリーダーはハナダシティから離れた裏庭で、辺りを慌ただしく見廻していた。誰かを待つには口元が震え、青白い顔は病気を思わせる。やがて木の陰から鋭い視線をした左の目尻に小さな傷を持つ男性の声に、長髪を振り払った。

「こ、これでいいでしょ！私の子ども達を返しなさい!!」

「まずまずだな…だが、チケットをハナダシティにいるトレーナーに配れたか。いいだろう。お前の子どもはハナダの峠にあるベンチに寝かしつけてあるぞ」

憤然な男を無視して、女性はハナダの峠へと向かう。一人になった男は小型の端末を

耳に当て、しばらくすると、別の男性が機械音で呼び、電波の拾いやすい場所に移動してから一言の語気を強める。

「こちらA班だ。クチバシティの状況はどうだ?」

「B班だ。こちらもジムリーダーのマチスから快い協力もあり、チケットはすでに配り終えただぞ」

「…そうか。引き続き、警戒を怠るな…」

そこで端末を切り、落ち着いた様子でポケットに入れる。常人であれば犯罪を行う際、挙動や表情に変化はあるも、顔色一つ変えずに常人と同じ動作を行う。この男には犯罪すら普段の行動と何も変わらない様子であった。

「…事前にヤマブキシティの警備員を買収しておけば行動範囲など制限される。ハナダシティとクチバシティにいるトレーナーを我々の企画した船に招待すれば、必ずイーブイを隠し持った奴がいるはずだ。どんな手を使っても必ず手に入れてやる…」

子どもの誘拐や脅迫の意識を通り越し、全てを通り越し、男の目はここではないどこか遠いところを見つめていた。

四

私は誰だろう。人が言うには私は『イーブイ』というポケモンらしい。でも私はどこから生まれたのか分からない。母親は誰なんだろう。父親は誰なんだろう。いや…も

しかしたら、そんなのは初めからいらないのかもしれない。

私と一緒に居てくれる女の子は『蕾』の名前を持っている。人間と呼ばれずに『蕾』は誰かがそう呼んでいたのかな。誰かが『蕾』の存在を認めてくれたのかな。私も『イーブイ』じゃなくて『特別』になりたい。誰かにそれを認めてもらいたい。そう呼ばれたい。

あのボールはポケモンには快適と聞こえていたけど、あの狭い中は居心地が悪そうだから入りたくない。少し揺れるけど、この中は暖かくて優しい。よく分らないけど、ここは落ち着くなあ。

のどかな時間はイーブイの周りをすり抜けていくようだった。旅は道連れ世は情け。新種のポケモンを連れた蕾は、耳を動かすイーブイと後をついてくるニドラン♂とボールで寝ているコイキングと共に、クチバシテイへと向かう。

2章 サントアンヌ号編

6話 二人の王者!栄光への挑戦!!

蕾がハナダシテイを出発して数週間たつても、クチバシテイは平穩で特に変わりはない。海の港に漁船の停泊した街であり、近くには山もある自然に恵まれた土地だ。恵まれた自然による森の迷路は旅人を迷わせることで有名なのはクチバシテイに住む人ぞ知る豆知識である。そんな平穩な場所から、今日は場違いな声が響き渡る。

「やつとクチバシテイに着いたよー!」

「キユイーツ!」

久方ぶりの建築物のある街のど真ん中で蕾とニドラン♂は両手を高く上げた。主に似てきているせい、ニーちゃんやさんは蕾の仕草を真似るようになり、いまでは四足歩行と二足歩行を使い分けるほどの器用さを持ちあわせている。ニーちゃんの器用さはクチバシテイに向かうまでの道のりにあった。耳の大きい野生のニドラン♂はツンとした耳が敏感であり、頻繁に痒くなる。

木や小石の少ない道のりの中を歩くうちから、足場に捉われない両足立ちを練習し、手で耳を引っ張って耳裏を掻く仕草を身に付けていた。旅に適応するポケモンの進化

した知識と成長の証である。実は大きな耳を均等に折り曲げて短い両手を伸ばして耳を掻く仕草は、蕾のお気に入りだったりする。

トレーナーの蕾もイーブイを預かる責任感とポケモンバトルの成長に板挟みにはなっているも、ポケモン達には自信のある指示を出しており、旅は順調だ。これまでの蕾は、漠然とチャンピオンになりたい気持ちでポケモンバトルをしていたが、時折ニドラン♂やコイキングやイーブイのお手入れをしながら反省会をする様になった。着実ではあるも、前に前へと進んでいる。

だが旅に出ているとはいえ、彼女は10歳の少女だ。性ホルモンが活発に生成される大切な時期であり、ホルモンバランスは崩れやすい。つまり、心が不安定になりやすい第二次成長期の真つ最中である。悩みや責任を抱えた少女は、ポケモン達には隠しているも、実は疲れていた。

(……まで何日もかかっちゃったから、少し休むついでにママに連絡しよう！)

傍からは元氣に見える蕾は、近況報告も兼ねてマサラタウンにいるママに連絡をいれようと、ポケモンセンターへ向かった。

—

「あら、蕾じゃない。電話してくれるなんて何かあったの?」
「……うん。何でもないよママ。久しぶりに声が聞きたくて」

流石に、イーブイの件は言わなかった。オーキド博士にも口止めをされているし、悪い人にママやパパを危険にさせたくは無い。オレンジ色の髪を撫でながら、充実した旅をしている風を装い、母親には寂し気な言葉で返した。

「そっか、そっか。いまどのあたり?」

ママは軽い口調のまま、蕾に問いかける。

「クチバシテイにいるよ。今着いたばかり」

それから旅のことを話した。ニビジムの戦いやお月見山のピッピのこと。これからクチバシテイに停泊しているサントアンヌ号のパーティーに参加することを。ママは軽やかにはつきりとした言葉で私を拗ねさせ、時に冗談で笑わせてくれた。ほんの少しだけ、肩が軽くなった気がした。

「大変そうね…気晴らしになるかは分からないけど、今日の13時にテレビを見てみなさい」

「何かあったっけ?」

「やっぱり、知らなかったわね。でも仕方ないか。ママも旅をしていた時は、ニュースとかには疎かったからね」

世間知らずな皮肉にも聞こえる声かけでも、力強い声で言う。パパはカントー地方を、ママはガラル地方を旅している。二人はポケモンリーグで出逢い、ライバルとして

戦い、そして切磋琢磨してる間に結婚する関係になったそうだ。

「シンオウ地方で久しぶりにチャンピオン戦があるの。それもあなたと同じくらいの歳の子よ。せつかくなら、休憩のついでに視てみなさい」

「…ありがとう、ママ」

「……大変なら無理はしなくていいわ。あなたの旅は…パパもママも応援しているからね」

「うん！私、頑張るよ!!」

不意打ちに似たママの言葉を、蕾はそう宣言する。電話を切った後の母親は大きく息を吐いた。あの落ち着きのない娘と何気ない旅の土産話は、親子というよりも、ポケモントレーナーとしての成長過程のように睦まじく、穏やかに感じた。母親はソファでのんびりと聞き耳をたてて座っていた父親の隣に座り、その時の微笑みや頬を膨らました顔を、決して忘れない様に胸に刻もうと心に決めた。

まだこの時では予感でしかないも、それでも無意識の中で急に連絡の無くなることを懐いていたのかもしれない。明るく眩しい愛娘との幸福な思い出は——突然の通報で、痛みに変わるのを。

一

ポケモンリーグ。それは地方のバッチを8つ集めたトレーナーのみが集まる競演の

場だ。大会のルールは二種類に分かれており、その地方で極めたポケモンを繰り出す四人のポケモントレーナーである四天王との連戦ルールとチャレンジャー同士で最後の一人になるまで戦うトーナメントルールに分かれる。そして最後の一人は、頂点に立つチャンピオンとの勝負になる。

シンオウ地方のポケモンリーグは上空を飛ぶ小型カメラを首に括り付けたキャモメとスタジアムを埋め尽くす観客の視線は、ある一点にそそがれていた。年に一回で行われているトーナメントルールではない。最も厳しい四天王との連戦ルールを乗り越えた実力者の登場に期待と熱気は高まっていた。

「さあ、久しぶりの幕開けだー!!ここシンオウ地方は熱気で盛り上がってるぜ!!」

実況者の煽りに、観客は同調する。

「今回の挑戦者は最年少での挑戦だ!!フタバタウン出身のトレーナー『コノハ』!!」

左右に開かれた厚い扉から現れた一人の少女は、ゆっくりとステージに移動する。青いセーターに羽織った黒色のジャケットに黄色いポケモンのワッペンを付けている。薄い水色のフリルのあるスカート。コツトンの帽子を被ったツインテールが印象的な女の子だ。

「さあ、ここがチャンピオンの登場だー!!!」

人差し指を天に向けた実況者の声が、これから来る人物を示唆する。観客やカメラに

緊張がはしった。

「無敗の美女であり、追い込まれることなくチャレンジをいなしてきた我らがシンオウのチャンピオン——シロナ!!!」

割れんばかりの歓声を背後に横断幕の噴煙から膝まで伸びた長い金髪を下した女性が姿を現す。上下黒のスーツに胸元には灰色の雫型の飾りを付けている。下した前髪から左目を隠しているも、力強い右目は挑戦者を捉えていた。

「あらためてチャンピオン戦のルールを説明するぜ！使用ポケモンは三匹。どちらかが先にゼロになった方が負けの勝負だ。きずぐすりは使用できないが、きのみの使用や持ち物を持たせるのは認められている。相性が悪ければ、交代もありだぜ——さあ、まもなく始まりだ！」

二

バトルフィールドに地を着けるコノハの全身は、観客席とは違う気圧に高揚感を抱えていた。四天王との戦ったバトルフィールドの様な同じ場所の類ではない。より高貴で闘争心を燃やし——全身の血液という血液が冷え——指先に神経が集まってくる触覚。それらは全てを形容すれば、楽しい…に言い換えられるだろう。

「あなたがこれまで感じたこと、ポケモンとの絆…私にみせて頂戴！」

「私は私の全力で戦います！いきますよ、チャンピオン!!」

互いに心情を言い、反対方向に離れていく。

「両者、バトルフィールドに立ち——今、バトル開始!!」

審判による闘争の鐘に、コノハの心拍音、呼吸音、それと体温は一体化した。

「いけ! 『ドダイトス』!!」

「天空に舞え! 『トゲキッス』!!」

同時に出したボールからポケモンが姿を現した。亀にしては甲羅から巨大な巨樹を持つ、たいりくポケモン『ドダイトス』をコノハは繰り出す。シロナからはしゆくふくポケモン『トゲキッス』が現れ、宙を一回転して地上にいるドダイトスに視界を捉えた。

「相性は私が有利ね! トゲキッス『エアスラッシュ』!」

羽ばたかせた風をドダイトスに向けて扇ぎ、コノハもろとも眼を瞑らせてしまう。風にしては暴風を殴りつけるより、刃で切り刻む表現に近い。だが、ドダイトスはトゲキッスを睨み付けたまま、どっしりと構えている。

「こんな攻撃じゃあ私のドダイトスは倒れないわ! 『ステルスロック』!」

口から無数の小石をばら撒き、やがて無色透明な色に変わって空気と同化した。見えない石は機雷に変わり、シロナの繰り出すポケモンや勢いよくフィールドから離れたポケモンに反応して襲い掛かる。充分にフィールドの主導権を握れたコノハは余裕の構えで『ドダイトス』をボールに戻す。

「ありがとう、ドタイトス：貴方の想いは無駄にはしない!!」

ドタイトスのボールを胸に寄せ、腰に付けたベルトにボールを引っかける。手探りで6個のボールに触れ、左から二番目のボールを取り出す。

「いくよー、『ミロカロス』！」

流れる星と水泡の弾ける演出からいつくしみポケモン『ミロカロス』の透き通った声を会場に通らせる。一瞬で荒波を穏やかな海上に戻したポケモンの出現に、シロナは微かに口を横に伸ばす。彼女も同じポケモンを持っている。だからこそ、このまま攻めては返り討ちにあう技の存在に、彼女は別の作戦を指令する。

「トゲキッス『でんじは』！」

上空から急降下したトゲキッスは、左右の羽を広げて電撃の波紋を浴びさせる。鮮やかな飛行能力からの技にも関わらず、ミロカロスの動きは機敏のままだ。艶めかしい長魚から赤い炎をチラつかせているのを、シロナは見逃していなかった。

（『でんじは』が効いていない。そう：『かえんだま』を持たしてるのね）

『でんじは』を放つまでの僅かな時間に起こった状態異常の原因を彼女は考察する。トゲキッスが上空から降りるまでの時間はそうかからない。ドタイトスによる耐久力とステルスロツクを警戒するあまりに、安全域まで飛翔して起きた時間ロスにより——『でんじは』よりも『かえんだま』による状態異常のタイミングを逃した。ここまで裏の

裏まで読んだ試合運びをする挑戦者の実力は、四天王を倒したと言われても納得できる。

そして同時に、コノハもミロカロスの射程範囲にある低空域に降りたトゲキツスを見逃さない。

「ミロカロス『ドラゴンテール』!」

しなやかに鱗の尾からトゲキツスをフィールドに吹き飛ばした後は、ドダイトスの『ストレスロック』が反応し、見えない小石が一瞬のうちにトゲキツスに襲い掛かる。この一連の動作に、白い羽を広げて伸びてしまった。

「トゲキツス、戦闘不能!」

審判の判定により、シロナはモンスターボールにトゲキツスを戻す。

「よく頑張ったわ。ゆっくり休みなさい」

ここは僅かながらでもシロナの失策であった。だがトゲキツスの残してくれた彼女の戦い方を、シロナは吉報と捉えていた。この程度の逆境はすなわちこちらの勝機だ。後ろに伸びた金色の髪をなびかせ、次のポケモンを繰り出す。

「鉄壁を砕け!『ルカリオ』!」

ボールからは人間と見間違おうはどうポケモン『ルカリオ』が構えをしたまま、ミロカロスを見据えていた。

「ルカリオ『はどうだん』!!」

「ミロカロス『どくろをまく』!!」

上空に向かって前進でろくろを回すミロカロスに、ルカリオの青白い球弾で遮られる。空間を凝固させた弾丸に技を止めてしまう。

「ルカリオの威力が強い! 『じこさいせい』!!」

「連続で『はどうだん』!!」

黒いかすり傷を瞬時に塞ぐも、ルカリオによる連撃は止まらない。だが、ルカリオとて、チャンピオンのポケモンとして数々の挑戦者と戦ってきた古い強者であった。ましてや、普段からシロナのミロカロスと組み合い稽古をしているだけに、何度も叩きこめば勝負がつくと分かっていた。

「ミロカロス、戦闘不能!」

やがて、力尽きたポケモンはバトルフィールドに横たわる。すぐにコノハはボールに戻し、次のポケモンを選ぶ。

「お疲れさま『ミロカロス』。もう一度お願い『ドダイトス』!!」

先ほどまでトゲキッスから逃げたポケモンの出現に、会場の観客から軽い野次が飛び。第三者からの見解では、ただステルスロックを撒いただけかもしれない。当事者にしか分からないトレーナーの駆け引きをする二人には、観客の野次など耳には届かな

い。

「ドダイトス『のろい』!」

ドダイトスから紫の蒸気を漂わせ、顔に血管を浮かせる。全身の血流を遅行させて素早さを犠牲に、攻撃と防御を高める技だ。抜きこんでた防御力と攻撃力を持つポケモン。耐久力を上げれば、先ほどまでの連続攻撃は通用しなくなる。

「そんな隙は与えないわ!ルカリオ『じしん』!」

バトルフィールドに渾身の拳撃を叩きこみ、大地を割る。大地を踏む両脚の力に、腰の回転、肩のひねりを相乗した、全身の瞬発力からなる攻撃。打撃音が会場に鳴れ渡り、その衝撃はドダイトスへと向かう。

「今よ!ドダイトス『じしん』!」

大地を支配するポケモンに『じしん』の波を押し量るのは造作もない。甲羅に生えた木を目印に寸前での技は観客席にも影響を与えた。応援で直立していた観客は、外に投げ出される様な感覚に座り込んでしまう。観客の落ち着いた時には、ルカリオは仰向けに倒れ込んでいた。

「ルカリオ、戦闘不能!」

何が起きたか分からない状況に、観客は戸惑ってしまふ。その状況を見ていた実況者は高らかに解説した。

「これは凄い!!ルカリオの『じしん』に合わせて、ドダイトスの『じしん』が炸裂したぞ!この技に競り勝ったのはドダイトスだー!!」

「あなたは素晴らしい戦いをしてくれたわ。ありがとう」

シロナは相性の不利をもともしない戦いをしたルカリオを労う。彼女の最後のポケモンは既に決まっている。彼女の出身地である『カンナギタウン』からずっと一緒にいる最高の相棒だ。彼女の心に反応したか、手持ちの一匹がカタカタと震えていた。

三

「私の最後のポケモンはあなたしかいないわ。いきなさい!『ガブリアス』!!」

「私はポケモンを入れ替えます。お願い!『ムウマージ』!!」

薄く伸びたエラ状の刃に尖った顔をしたマツハポケモン『ガブリアス』と紫の被りに胴体の宝石を身に付けたマジカルポケモン『ムウマージ』の登場に、観客の期待は高まる。ガブリアスは攻撃力を、ムウマージは特殊攻撃の得意なポケモンだ。しかし、シロナとコロハは落ち着いたまま別の作戦を連想していた。

「ガブリアス『つるぎのまい』!!」

「ムウマージ『わるだくみ』!!」

ガブリアスのエラに光を集め、ムウマージの目は赤く純血する。お互いに拮抗した状況にひしめく空気。先に動いたのはムウマージだ。

「ムウマージ『シャドーボール』!」

全神経を集中させた黒い球状のエネルギー弾をガブリアスに放出させた。この技はゴーストにのみ感知できる怨念を集合させた実態のない攻撃である。ムウマージに突撃したガブリアスは勢いを落とさず、鋼色まで研ぎ澄まされたエラを滑らせ、バトルフィールド外へと軌道を反らさせた。

「うそ?! シャドーボールを弾いた?!」

「ガブリアス『ドラゴンクロウ』!!」

技を出した一瞬だけおきる精神の途切れたムウマージに、ガブリアスの手刀を味わう。ジェット機に負けない速さに上乘せされた手刀はどのポケモンも立ち上がれない。ムウマージはフラフラになりつつも、地上の落ちる寸前でふゆうをしていた。意識の遠のく感覚を、トレーナーと出会った場所を思い出して踏み止まっていた。

「よく耐えたね! ムウマージ『ほろびのうた』!!」

「ガブリアス『ストーンエッジ』!」

鮮麗に聞こえたコノハの声から喉の痞えに逆らいながら歌声を張り上げる。ムウマージに向かわず、地面を叩きつけたガブリアスの衝撃から呼び起こされた尖った岩が全身に突き刺さった。先にドダイトスとルカリオの『じしん』で割れたバトルフィールドによる、遠近攻撃である。

「ムウマージ、戦闘不能!!」

小刻みな呼吸音のするムウマージをボールに入れる。少なくともかなり無茶をさせてしまった。頷いて深い溜息をついたとき、次の一手を決める決定打を繰り出した。

「最後はやっぱり頼っちゃうね。大地を揺らせ!! 『ドダイトス』!」

コノハのエースであるドダイトス。シロナのエースであるガブリアス。二匹のポケモンは、同時に咆哮した。

「ガブリアス『ドラゴンクロー』!」

「ドダイトス『のろい』!」

ガブリアスの鋭利な刃による連撃にもドダイトスの姿勢は崩れない。次第にガブリアスの身体に黒い斑点を目立たせ、ムウマージによる『ほろびのうた』に蝕まれる。

「もう時間がないわね…あのドダイトスはかなり固い。でもね…」

あと数分もすればガブリアスは黒い斑点に浸食されて戦えなくなる状況にも関わらず、シロナは淡々と言葉を繋げていく。

「あなたがドダイトスを信頼してるように——私もガブリアスを信じている! いきなさい、ガブリアス!!」

広げた両翼に力を込めて、ガブリアスは身体を大きく振り上げる。始まりから変わらぬ雄姿。主人をチャンピオンにして幾多の開戦を経てなお不敗。無双にして、シロナと

の絆の象徴。過去現在未来を通した一人と一匹は高らかに、その技を言う。

「げきりん!!!」

解き放たれた竜の因子に、かき集められた感覚は閃光と化し、渦巻く放流は大地を支配した。

(これまで見たことのない桁外れの威力!それにあの鋭い刃——攻撃力を上昇させる『つるぎのまい』の影響か!)

苦々しい顔をしたまま、四本脚で踏ん張るドダイトスを見る。

(限界が近い。それでもドダイトスが諦めないなら——私も諦めない!!)

もはや、『ほろびのうた』での戦闘不能は望めない。先にガブリアスの攻撃でドダイトスの体力は尽きてしまう。だったら温存していた最後の技でガブリアスを倒す。はどうだんによるミロカロスの『じこさいせい』で水気を含み、このひび割れたバトルフィールドの条件が揃い、初めて最高出力を出せる草タイプ最強の打撃技を。

「真つ向勝負よ!『ハードプラント』!!」

割れた大地から大木のように太い蔓がガブリアスに向かう。蔓を力任せに叩き落とすガブリアスによる砂埃で観客には試合の状況は分からない。一度の打撃音から静まり返るバトルフィールド。上空からマイクを握ったまま、実況者でさえ一言も話さない。

「いい勝負だったわ。これ以上の言葉はない」

誰にも聞こえないほど小さな声で言うシロナ。砂埃の晴れたバトルフィールドには――動かないドダイトスと千鳥足のガブリアスがいた。

「遂に決まったあー!! 激戦に次ぐ激戦!! 最後に勝利を手にしたのは、我らがチャンピオン『シロナ』だ!!」

ある観客は叫び、ある観客は一定の強さで拍手をして祝福する。

「シンオウ地方からチャンピオン戦をお届けしたぜ!! ここまでみてくれてありがとうな! またどこかで会おうぜ!!」

テレビの中継はここで終わる。テレビ画面はニュースの報道に切り替わった。

四

「チャンピオン戦…すっごい戦いなんだね。見てるこっちもドキドキしちゃったよ」

「キイクユ〜ツイ」

ポケモンセンターで飛び跳ねるニドラン♂。さつきまで蕾の隣でじいと熱心に見ていた。

「エブイ〜」

窓の隙間風に耳を揺らすイーブイ。不愛想な態度ではあるも、実はテレビの前ではかじり付くように鑑賞していた。

「コオ〜ゴオ〜」

何の前触れもなく寝ているコイキング。ちなみにチャンピオン戦もずっと寝ていた。最終的にニドラン♂とイーブイに胴上げをされて床に落とされてからようやく起こされた。何度も見慣れた光景であり、二匹の雑な起こしかたには苦笑してしまう。

「よし!せっかくサントアンヌ号で沢山のトレーナーと戦えるんだもん。いっぱいバトルして強くなろうね!!」

ポケモンセンターで三匹を診てもらい、意気揚々とサントアンヌ号の停泊している港へと歩を進める。街では感じにくかった磯部の香りは強くなってきた。入り口付近を通り過ぎようとすると受付カウンターの呼び止められる。

「サントアンヌ号へようこそ…ちよつとお客さん、チケットはありますか?」

「あ、そっか。すっかり忘れてました。これですよね」

蕾はハナダシテイのジムリーダーから貰ったチケットを差し出す。

「はい…はい、結構です!ようこそ、サントアンヌ号へ!!」

堤防から長い通路を渡ればお目当てのサントアンヌ号の全貌が明らかになる。しばらく眺めていると、半袖姿に青いネクタイを締めた男の人に声をかけられた。

「お嬢ちゃん、ここの乗客は対戦を望んでいるトレーナーもいますが、長旅で退屈している方もいらっしやいます。船を荒らさなければ、暇つぶしになりますので積極的にポケ

モンパトルをして下さい」

「わ、分かりました」

男性に返事をしてから、サントアンヌ号に乗れる昇り階段を歩いていく。海辺で高いところ上がったせいか、海風の香りとそよ風は気持ちいい。船の室内に入る取っ手を握り、軽く開きかけた時であった。

「なんだかなー!!!」

油断していた蕾は、突然の大声に身体をのけぞらしてしまう。室内は広く、天井には白のガラス細工を施したシャンデリアにモンテイクの本棚や蓄音機の家具。その中央では選り取り見取りの鮮やかな食事が並べられていた。

何事も無ければ華美さを強調したホテルのような内装に見惚れていただろう。ある男性が、コックに惜しげもない称賛を送っていなければの話だが。

「美味い！絶品!!最強だ!!このオクタン焼き!!もう二パック買うぞー!」

膝まで伸びた緑色のコート。茶色のグローブに金色の髪の毛に茶色の長ズボンが男の姿を強調させている。オクタン焼きにはしゃいでいる姿よりも、男の声に驚いた蕾はあっけに取られてしまうのであった。

7話 船上のバトル!!クロツグというトレーナー! (上)

サントアンヌ号の中央広場の片隅。

立ち話をするドレスコートをした人に眼をくれず、オクタン焼きを食べ終えた男は二ヨロモ菱餅やアチャモ饅頭をテーブルに並べ、ポケモンバトルをするトレーナー達を終始見ていた。ほのかに立ち昇っていた湯気が無くなるほど、この男は長い時間、技を指示するトレーナーとそれに応えるポケモンの姿を見ながら、それを肴に食べ物をつまんでいる。そんな時に、彼のポケナビから着信音が響いた。

「おう、もしもし?」

「やつと繋がりました!今どちらにいますか!?置き手紙一つ置いて、一週間も連絡なしは流石に見逃しませんよ!!」

金切り声を上げる女の声に、男は平然とした態度で割り切る。

「それは悪かった!カントー地方に強い『ミニリュウ』がいる話を聞いて、いてもたってもいられなくなつてな!」

「それなら電話くらい繋がる様にして下さい!!こっちは貴方のいない間の書類整理やら全部やるはめになつたんですよ!」

「かなり敏感なミニリユウでな！ポケナビの電波でも危険を察して逃げちまうんだ。まあ、今日の朝にやつと捕まえたんだが！」

「もういいですよ。それで…今どこにいますか…」

電話の女性スタッフからすれば、この男の行動力の速さは今に始まったことでない。だが、一度決めたことには素早く言動に移せる性分は、長所でもあり、他を振り返らない短所でもあった。

「ちょうどサントアンヌ号が止まっていたからな！二日すれば、シンオウ地方に向かうからそれまでバカンスだ！それまで、そっちはよろしくな!!」

「ああ、ちよつと待つてください。クロツグさ——」

「じゃあ、任せたな！」

それだけ言い、クロツグと呼ばれた男はポケナビを一方的にきつてしまう。クロツグ——彼は、かつて現チャンピオンであるシロナとの激戦を繰り広げた人物であり、バトルフロンティアのフロンティアブレーンを務めている長でもある。それは、地方のジムリーダーとは比べられない実力を持っていた。

「まあこのまま帰るには勿体ないな…せめてミニリユウとつり合えるポケモンとトレナーがいればな——おう？」

ひとり語りを続けようとした言葉は、オレンジ色の髪に透き通った眼をした少女に遮

られる。出すポケモンは進化前のポケモンを二匹であり、それをふまえてもなお、お互いに彼女とポケモンは尊敬し合っていた。

サントアンヌ号にはエリートトレーナーやカントー地方とは異なるバッチを帽子に付けたトレーナーも乗車している。だが大半は元から逸脱した強さのあるポケモンを繰り出すばかりにあり、ポケモンの実力を引き出せるトレーナーには、それを扱える器を備えていない。つまりポケモンの実力を発揮する前に勝敗が付いてしまい、トレーナー自身が成長していないのだ。

「ポケモンを愛する心…そしてお互いを尊敬する動き…中々いい筋をしているな」

現に少女の勝敗は、敗北ばかりではあるも、最終進化したポケモンを一步まで追い詰めていたのが、その証明だ。

「俺の見立てはどうか、バトルすれば分かることだな!!」

勢いよく立ち上がったクロツグの勢いに、座っていた椅子は数センチ後退する。椅子を整えず、彼の足と視界はフードに膨らみのある少女——ツボミを捉えていた。

一

一口サイズの料理やデザートを調理するコックだけでないサントアンヌ号の中央広場にはポケモンバトルをするフィールドも常備されている。必然的にポケモンバトルをするトレーナーと鑑賞する観客の構図となり、常に新しい刺激を求めようと、人の視

線は自然に向かっていた。

他のトレーナーより身長差も一段と低く、幼いツボミは大人の気迫に自分からは積極的に声はかけず、バトルフィールドで立ち見をしては、声をかけられたトレーナーのみ対戦をしていた。バトルフィールドに立つ時はオレンジの帽子を深く被り、何度も戦い慣れた彼女の眼はのほほんと対戦者を見ていた。

「いけ『デンリユウ』！」

「あれって何のポケモンだろ？でんりゅう…だっけ」

ポケモン図鑑を取り出してポケモンを映し出せば、大まかな情報と生態に関する解説が流れる。

「可愛いかも…でもカントー地方にはいないポケモンかあ。タイプはでんきかな——それなら…『ニーちゃん』お願い！」

「デンリユウ『かみなりパンチ』！」

「ニーちゃん『どくづき』！」

右手に電気の弾かれる音を鳴らしながら腕をひくライトポケモン『デンリユウ』に、素早さで小柄なニドラン♂を見切れずにいる。上体を捻りながら近づくニドラン♂は、デンリユウがパンチの度に接近をしなければならぬ欠点を、ツボミとニドラン♂は見逃さない。

「ニーちゃん『にどげり』！」

小さな足から飛び出した脚力の勢いに腹部からめり込まれたデンリュウは脱力する。

「ちい！だったら『バタフリー』！」

「そつちなら、お願い『コーちゃん』！」

宙回転しながら現れた蝶ポケモン『バタフリー』と地面に一定間隔で跳ねる『コイキング』は比べても対照的に優美さの差がある。先に進化前のポケモンに負けたトレーナーにとつて、最も弱いポケモンの登場には彼のプライドを逆なでする侮蔑を免れなかった。

「馬鹿にしてんのか!?バタフリー『エアスラッシュ』！」

「コーちゃん、天井まで『はねる』！」

羽を広げて飛ばたくたびに鋭利さのある風を巻き起こす。ツボミの指示から天井に向けて跳ねたコイキングは天井にまで身体全体を叩きつけ、近くにあったシャンデリアを揺らす。これに驚いたのはトレーナーだった。バトルフィールドから天井まで3メートル以上はある高さまで飛び上がるコイキングなどこの目で見たことがなかった。

「そのまま『たいあたり』！」

ツボミにとつて今に始まったことではない。尻尾で叩く攻撃やヒレで身体を支えるバランス感覚。何度も『はねる』を繰り返して高く飛び続けた結果で生まれた瞬発力。

コイキングにとって個性を活かした戦い方だった。

天井を尻尾で弾いた落下速度を体当たりに乗せた攻撃に、バタフリーは地に伏せてしまふ。

「負けんな！『ねむりごな』！」

「避けるよ！思いつ切り飛び跳ねて!!」

黄色い鱗粉に反応し、バタフリーを尾で叩いた衝撃で天井まで跳ね上がる。再び全身でのボディアタックに鱗粉は拡散し、バタフリーは伸びてしまった。トレーナーはバタフリーをボールに戻してからツボミに近づく。

「…いい勝負だったな」

「対戦ありがとうございました」

軽い握手を交わしたツボミはある一つの達成感があった。イーブイを守り切る強さとポケモンを預かる責任感を持てるほどに、明確な自信はない。トレーナーとしてポケモンを信頼し、長所を伸ばす戦い方を信じてきた。負ければ自分の指示を振り返り、勝てばポケモン達と喜びを分かち合う。そのやり方が間違いではない実感を得ていた。何度目かの戦いをするうちに、彼女はイーブイに声をかける。

「いける、イーブイ？」

「エヴウブイ〜」

フードで丸くなる毛玉は、形を崩さずに返事のみで動かない。

「相変わらずかあ…もうちよつとは、認めてもらいたいよう」

出会ってから一度もバトルをしないもの、お決まりの反応には慣れていても辛いものであった。

「おいどうかしたか!?!」

「大丈夫ですよ。えつと…コーちゃん、お願い!」

少し戸惑いつつ、コイキングを選び出す。区切りのつくまでポケモンバトルを行った時、ツボミはニドランニドランとコイキングに向き合う。

「さ…今日はいっぱいバトルできたね。せつかくの船に来たから、あと一回だけバトルしてからゆつくりしようね!」

二匹のポケモンは一鳴きをし、モンスターボールに収納される。

「反省会の前にちよつと休憩っ!!」

言い終えてすぐに、ツボミの気持ちはすぐにデザートへと向けられた。旅の道中は簡単なお菓子を手作りはしてはいても、シユフの作る本格的なお菓子は砂糖や粉の質は圧倒的によく、旅では保存の効かない材料で作られたデザートはご馳走であった。

「このショートケーキ綺麗だなあ!目に入れても痛くなさそう…いっただけま——ぶわあ!!!」

「君のバトルは実に素晴らしい、俺と勝負してくれ!!」

「ああああああ!!目があゝ目があゝああああ!!」

ツボミの背中にボディアタックに近い衝突から顔全体にショートケーキを押し潰してしまふ。一般的な少女の身長より低いツボミが、三十cmの差がある人間の、ましてや男性の衝突に耐えられるはずもない。少女の叫びに凄惨な顔をしている現状に、フードで丸い毛玉状態を解いたイーブイは深い息を吐いた。

「ブイゝ」

鳴き声からイーブイの瞳は青白く光りだす。両目に入ったクリームの激痛に手で抑えていたにも関わらず、ツボミは前にいる人や物をはつきりと識別できていた。

(これってイーブイのお蔭?目は閉じてるのに、目の前に何がいて、何があるのかが分かる)

現実離れた出来事は激痛でパニックを起こしていたツボミを現実に引き戻すには充分であつた。

「ふ(す) みませんゝシャワー室までふ(連) れてつて下さいゝ」

「かしこまりました。それではご案内します」

スーツ姿のウェイターは顔中にクリームと潰れた苺をくつつけた人にも、まあこんな人もいるだろう、とした対応でツボミをエスコートしていく。とり残されたクロツグは

一瞬だけ考え込むも、すぐに顔を上げた。

「バトルをやり逃したか。確かサントアンヌ号には特別なバトルフィールドがあったな。詫びも兼ねてそれを借りるか」

こう決めたクロツグの行動は早い。まずはサントアンヌ号の船長に運行状況を確認する。またVIPルームにいるサントアンヌ号のオーナーにバトルフィールドの予約と彼女以外のトレーナーの人払いを約束させた。フロンティアブレーンでなく一般トレーナーとして、クロツグが心を騒がせたのは、久しぶりのことであった。

二

豪華客船であるサントアンヌ号は個室部屋も煌びやかだ。そこに備え付けてあるシャワー室も銀製の浴槽とシャワーで統一されており、ここで長時間の入浴も退屈させない作りであった。投影した視線から呻き声を上げたまま、ツボミは途中で変わった女性ウエイターに服を脱がされてしまう。生まれたままの姿となり、そのままシャワーを浴びるも、勢いの無いシャワーは不満であった。

「ふへえ、顔のクリームが落ちても身体に纏わりついてくる。何か気持ち悪いなあ」

船の構想とはいえ、水圧はどうしても低くなってしまう。元々、この豪華な外装や内装はウイシユ地方で創設されたサントアンヌ号は、水圧や電機の供給は水の都『アルトマーレ』の自家発電技術を参考にしていた。自ら水と電気やガスを生み出す技術ではあ

るも、限らない資源の節制でシャワーの水圧の低さがネックであり、建造当初からのミスなのは管理者のみ知る課題であった。身体の水気を拭き取り、服を着替えてからバスタオルで髪をゴシゴシ拭き、浴槽の扉を開けた

「ひどい目にあつた…男の人だと思うけど誰だつたんだろ？」

彼女自身は何が起きたのかは分からなかったが、根に持つている様子はない。少しだけ湿った短髪に火照つた身体には、ほのかな湯気を漂わせていた。

「お客様、ご加減の様子はいかがですか？」

「えっと…大丈夫です」

「それはよかったです。先ほどぶつかってしまったお客様がお詫びに特別なバトルフィールドでポケモンバトルをしたいとのこと…準備が出来ましたらお声をかけて下さい」

これには流石のツボミも顔をしかめて怪しんでしまう。広間にあつたバトルフィールドでさえも十分すぎる物であり、それ以上の物は想像できない。また自分よりも強いトレーナーは沢山いて、結果はどうであれ、負けているバトルの方が多い。何故私は特別というフィールドに招待するのか。それともどこかで特別なイーブイと分かつてしまったのか。彼女の内面から、開いた隙間に絶え間ない不安で塗り替えられていた。

「あの…お客様？どうかされましたか？」

「何でもありません。ちょっとだけ待って下さい」

そんな問答はウエイターの声で瞬間に過ぎ、少女の目に光が戻ると、ツボミは決まって愛想笑いをして誤魔化した。そんな少女の顔を見つめ、何事も無かったかのように、部屋を見廻してから部屋を出る。部屋でニドラン^ニとコイキングにキズくすり^ニで傷を癒してから、ウエイターに声をかけた。

「準備できましたよ」

「了解しました。では、私の後について来て下さい」

赤いじゆうたんを踏みながらウエイターの後を付いていくと関係者以外立ち入り禁止の札のあるドアを開ける。忙しなく動き回るコックやウエイターの通路に足を止め、顔を見上げてウエイターに身体を向ける。

「こんなに人がいっぱいいて…あの、ここを通りますか?」

「傍からは忙しく見えますが、私達は互いに当たらない歩行ルートに合わせて効率的に動いているのですよ」

「あつ…はあ…」

「ルートを外れてしまうとすぐに当たってしまいますからね。歩行をあわせますのでその後について来てください…こちらです」

それでもまだツボミはウエイターの後に付いていくのは楽ではあるも、彼女にとって

は働く大人の緊張感や圧迫感に、胸の内から焼付く痺れには慣れないし、明らかに場違いな少女のツボミは早くこの場を離れたかった。

「あのう…特別なバトルフィールドってどこにあるんです？中央広場にあつたものでも立派だったのに…あれ以上何ですか」

「それは何よりです。ご案内しているバトルフィールドはチャンピオンや四天王、ジムリーダーなどの御忍びで来られた方向けにある専属トレーナー向けのフィールドとなつています」

「益々分かりませんよ。私なんか、まだ半年も経っていないトレーナーなのに…誰の招待なんですか」

「申し訳ありませんが、トレーナーに関してはお答えできません。我々のバトルフィールドは外部からは見えない所に設置してあります。これは外からバトルフィールドを見られず、マスコミやメディアを気にしない為の処置です。しかし、入るにはこのスタッフ専用の通路を通らなければなりません…話している間に着きましたね」

ウェイターは扉の前に立ち止まり、ポケットに入っていたカードキーを手渡す。

「ここからはこのカードキーを取っ手にかざして御一人で進んで下さい。しばらく前に進めば長い螺旋階段があります。そこを昇れば、バトルフィールドにつきます。私はここで、お客様のお帰りをお待ちしていますね」

カードキーを手にしたツボミは扉の取っ手にかざすと、「ガチャリ!」という金属音が鳴り、薄暗い道を進めば、螺旋階段が目についた。ふと顔を見上げると、少女は、大人の行き交う道やポケモンバトルをした精神の疲労から地団駄の一つも付きたくなかった。ピルの五階建てに相当する高さまである階段を昇らなければならぬからだ。

ゆっくりでも歩いていけばいい——

それだけなのに、なんだか億劫だ。

一人、螺旋階段を昇りながら、ツボミは思った。学校でモンスターボールをポケモンに当てられなくてクラスメイトに無視されてきたのと違う。一人前のトレーナーとして認めてもらう為にママの手伝いをして、相手にされなかったのとも違う。今までの思い出から彼女には想定できない覆いかぶされたものに、一瞬だけ自分では分からないものに力負けした。想いが根負けした。せめてツボミは強気に取っ手を掴みながら歩いていく。

ようやく螺旋階段を昇り切った通路を真っ直ぐに進めば、スポットライトで土の敷き詰められたバトルフィールドが眼前に広がった。薄暗い場所から明るい場所へと、目が慣れてくると見覚えのある男性がたたずんでいた。

「え…オクタン焼きのおじさん!?!」

「なんだそれは…俺の名前はクロツグだ!」

バトルフィールドには腕に手を組んだクロツグに、その隣で落ち着かない様子で周りを見渡すミニリュウ。落ち着かないミニリュウはクロツグの名乗り初めてからは身体をゆっくりと伸ばしていた。

「最高のバトルフィールドだろ!?ここは予約なしでは滅多に使わせてくれないのだがな——急だが使用許可が下りて運がいいぜ!!ハッハッハア!!」

大きな声で高々と笑うクロツグの声は高圧的であるも威圧的ではない。ツボミは道ですれ違ったスタツフとは違う雰囲気、覆いかぶされていた何かの感情が剥がれた気がして、落ち着けていた。

「ここに来たからにはバトルがしたくて来たんだろ?俺は君のバトルを見て興味が湧いて誘った!ポケモンを愛する心とトレーナーを信じる心…それをこの俺と——」

言い終える前に、クロツグの投げたモンスターボールからは、三日月を思わせるポケモンが現れる。

「——この『クレセリア』にぶつけてみる!!」

ポケモントレーナー独特の闘気に当てられたツボミは、反射的にニドラン♂が入っているモンスターボールに手を伸ばした。これが最も信頼しているポケモンであり、最も愛しているポケモンだからだ。それに鼓音する様に、ボールにいたニドラン♂も確かな脈音を震わせていた。